

辰口町来丸サクラマチ窯跡

辰口中部地区農免農道事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

資料編

1984・3

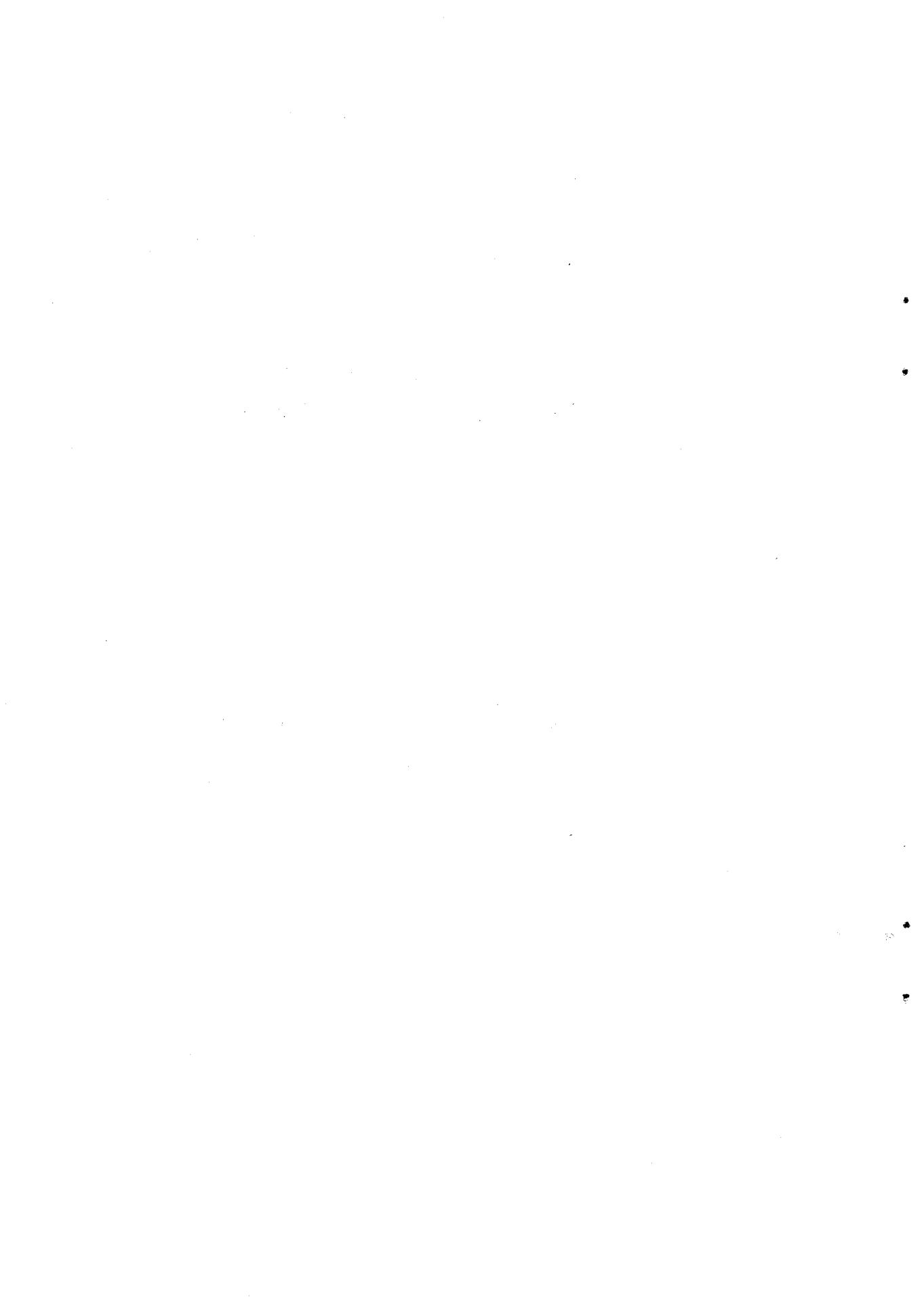
石川県立埋蔵文化財センター

辰口町来丸サクラマチ窯跡

辰口中部地区農免農道事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

資料編

石川県立埋蔵文化財センター



発刊にあたって

昭和 54 年に設立開所した石川県立埋蔵文化財センターでは過年度に発掘調査を実施し、報告書の未刊行の遺跡については、広く未報告資料の活用を促進すべく五ヶ年計画事業として遺物整理事業を計画立案した。本遺跡は、当計画の 4 年事業として実施し、遺物の分類、実測、トレースは主として石川県埋蔵文化財協会に委託して行なった。石川県の北陸自動車道建設に際して提起された埋蔵文化財の問題の担当部課として細々と設置された社会教育課文化財係、文化室、文化財保護時代に激務のうえ遅延し未刊行のままの状態の続いている遺跡について早期に整理し本報告として刊行することを目的とした。また、十数年を経過しているため発掘担当者の死亡、転出等があり思うにまかせぬ状態のまま収蔵庫の中に収蔵する結果となった。これらの状況は必ずしも正常な姿とは言えず内外の研究者、県民のあいだから早期に未報告資料の公開を求める声が次第に高まりつつあった。これらの経過をふまえ、石川県立埋蔵文化財センター設立を契機として本事業は計画、立案され実施されている。本報告の辰口町来丸所在のサクラマチ窯は、昭和 48 年以前に計画、立案された金沢市と加賀市と直結する加賀産業道路建設設計画に伴なって実施されたものである。詳細な経過については、昭和 50 年 3 月 31 日に刊行された、「辰口町来丸サクラミチ古窯」辰口中部地区農免農道事業に係る埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査概報石川県教育委員会 1975・3 に譲るとして本遺跡は、当時活用していた昭和 48 年版「石川県遺跡地図、地名表」には登載されていなかったものである。予定路線内の踏査に際して、地域住民からの聞き取り調査により発見され、当時の担当課、耕地建設課と協議のうえ昭和 49 年度事業として発掘調査を実施したものである。また当時の調査記録類については、当センターが保存管理に当っているのであるが、調査時の所見の重要さを考がみ、昭和 50 年 3 月 31 日に刊行した調査概報については、そのまま原文で掲載することとした。また、概報以後の遺物整理作業、本報告の編集にあたっては、発掘担当者の意に注ぐわない結果となった憂いが多々ある。この事については先述したとおりであるので多くの識者の寛容なる御快諾を願うのみである。一方、遺物整理にあたっても調査担当者の意に注ぐわない面も多くあろうかと思われるが、ほぼ検出した遺物の大半は復元、実測は終了し、本報告に掲載できたものと思われる。ただし、個々の詳細な遺物の出土状況等については知る由もなく、ラベル、もしくは遺物に注記されたままに報告した。また、本報告の未報告資料の公開を目的としているため、また、予算の制約もあり「資料編」として刊行せざるを得なくなった。一部、出土状況の不明な遺物については、本報告には割愛をしたものが、数点ある。それらは、当該窯跡の存続年代以前、以後の土師器である。また、概報に記載もれの窯跡構造

の詳細等についても、今回には、ふれることはできなかった。これらとあわせて、出土遺物の詳細な観察、検討は次回の報告書に譲ることとする。遺物整理にあたっては、埋蔵文化財協会の川端敦子、小屋玲子、小谷紀美子、小林尚子、山岸康子、浅野豊子、松田智恵子、新谷由子、新野吉枝の各氏があたった。また、本報告の編集は平田があつたが、当時の発掘担当者との連絡不充分のまま、また予算の関係上、「資料編」としての体裁としても不充分のまま刊行せざるを得なくなつたことを深くお詫びする次第である。今後、本報告としての第II分冊を刊行する予定で鋭意努力する方向で進めるつもりであるので、今回は、遺物の詳細な検討のない「資料編」として刊行する次第であることを申し添えて編集後記とする。(すべて編集責任は、保存技術係長 平田天秋にある)

目 次

発刊にあたって

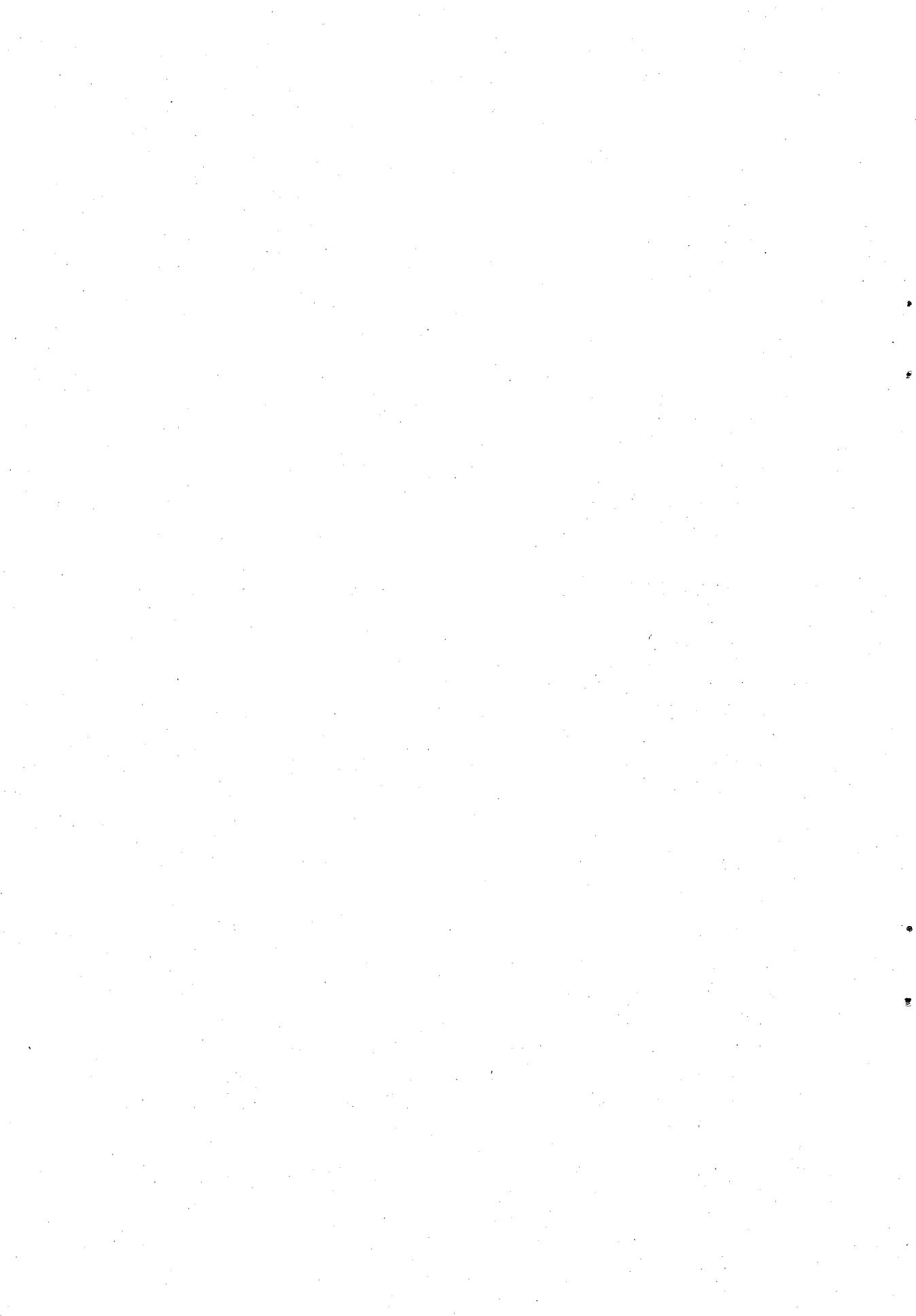
資料編

概報目次

I 位置と環境.....	1
II 調査経過.....	2
III 窯体構造とその他の遺構.....	4
(1) 第1号窯（第3図）.....	4
(2) 第2号窯（第4図）.....	4
(3) 第3号窯（第5図）.....	8
(4) ピット状遺構.....	8
IV 出土遺物.....	8
(1) 第1号窯出土土器（第6、7図）.....	8
V まとめ.....	13

資料編挿図目次

第1図 第1号窯出土須恵器（第1床）
第2図 第1号窯出土須恵器（第1床）
第3図 第1号窯出土須恵器（第1床）
第4図 第1号窯出土須恵器（第2床）
第5図 第1号窯出土須恵器（第2床）
第6図 第1号窯出土須恵器（第2床）
第7図 第1号窯出土須恵器（第2床）
第8図 第1号窯出土須恵器（灰原）
第9図 第1号窯出土須恵器、瓦（灰原）
第10図 第1号窯出土須恵器（灰原）
第11図 第3号窯出土須恵器
第12図 第3号窯出土須恵器
第13図 第3号窯出土須恵器
第14図 第3号窯出土須恵器
第15図 第3号窯出土須恵器
第16図 第3号窯出土須恵器
第17図 第3号窯出土須恵器
第18図 第3号窯出土須恵器
第19図 出土須恵器（各トレンチ）
第20図 出土須恵器（1～5石組出土、他はトレンチ出土）
第21図 出土須恵器
第22図 出土須恵器
第23図 出土須恵器
第24図 出土須恵器（トレンチ）



1975概報転載

辰口町来丸サクラマチ古窯

辰口中部地区農免農道事業に係る
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査概報

1975・3

石川県教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和49年度に石川県教育委員会が実施した農免農道事業に係る発掘調査概報であり、調査費用は、石川県農林部耕地建設課が負担した。
2. 調査期間 昭和49年4月15日～5月21日
3. 調査指導講師
 - 高堀 勝喜（石川考古学研究会々長）
 - 安村 律義（　　〃　　顧問）
 - 上野 与一（　　〃　　幹事）
 - 橋本 澄夫（　　〃　　）
 - 安村 敬学（石川考古学研究会々員）
 - 田中 熱（　　〃　　）
4. 調査担当者
 - 高橋 裕（県教委文化財保護課主事）
 - 左古 隆（　　〃　　）
- 協力者
 - 辰口町来丸地区有志
 - 金沢市二塙地区有志
5. 本書の写真撮影・図版作成・原稿執筆・編集は高橋があたった。
6. 図版VIII～XVIIに掲げた土器は、荒木繁行（石川考古学研究会副会長）、安村敬学両氏の復元による。

辰口町サクラマチ古窯跡

I 位置と環境

本古窯跡は、能美郡辰口町来丸35の8（通称サクラマチ）に所在し、石川平野を西流する手取川は、典型的な扇状地を形成（手取扇状地）するが、遺跡は扇頂部南西側に連なる能美丘陵の北端に位置する。北陸鉄道能美線来丸駅より南へ約340mで達し、北に流れる手取川へは約1.4kmを距てている。窯跡は、来丸区から南へ延びる狭小な谷のつきあたり、北側斜面に立地し、現在の標高は81.2mを測った。



- | | | | |
|---------------|-------------|------------|-------------|
| 1 サクラマチ古窯跡 | 6 来丸古寺古墳群 | 11 寺畠薬師坂古墳 | (1 : 25000) |
| 2 来丸古墳・来丸天明寺跡 | 7 茶臼山古墳群 | 12 寺畠窯跡 | |
| 3 岩内茶仙堂遺跡 | 8 和氣古窯跡 | 13 金剛寺跡 | |
| 4 来丸古墳群 | 9 和氣下和氣古窯跡 | 14 旭台A遺跡 | |
| 5 来丸物見山古墳群 | 10 和氣和田見古窯跡 | 15 旭台B遺跡 | |

第1図 遺跡付近の地形図

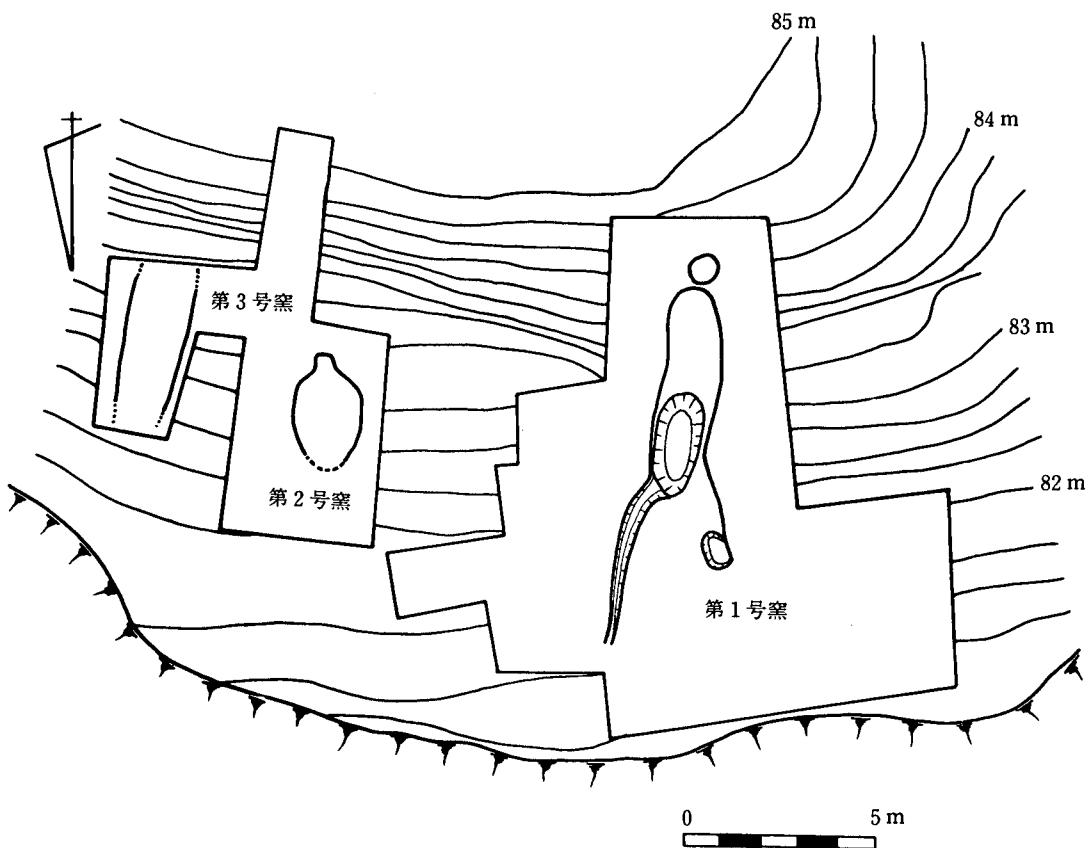
本古窯跡が立地している能美丘陵上、特に手取川に面する丘陵には、原始、古代の遺跡が数多く分布している。すなわち、当古窯跡東方約4kmの洪積台地上には、現在のところ県内唯一の先土器時代遺跡である灯台^{とだい}釜^釜遺跡が所在し、同じく東方約1.6kmには、繩文時代および中世城跡の^{あやう}飴生^{あめう}遺跡、北東約800mには、岩内火釜繩文遺跡や岩内茶仙堂遺跡（中世墓地）があり、南東約1kmには、旭台A遺跡（繩文前～後期）、須恵器窯跡（平安時代）と推定される旭台B遺跡がある。また、南方1.6kmには、徳山窯跡（平安時代）、同じ2.6kmには、寺畠薬師坂古墳、寺畠窯跡、虚空藏山1、2号横穴墳などがあり、南西約2.5～3.0kmには、奈良末～平安初頭の須恵器窯である和氣古窯跡（第1～3号窯）も所在する。さらに来丸より西方に連なり手取川を見下す丘陵頂部には、多数の群集墳が分布している。本古窯北側の丘陵上には、来丸1～4号墳、来丸1～4号墳、来丸古山1～3号墳が所在し、西方約2～2.5kmの範囲には、茶臼山古墳群（1～10号墳）同じく西方3.3kmには、円形周溝墓を含む西山古墳群（1～14号墳）、同4.5kmの和田・末寺・寺井山の各独立丘には前方後円墳を含む和田山古墳群（1～21号墳）寺井山古墳群（1～6号墳）、末寺山古墳群（1～15号墳）など70～80墓にのぼる古墳が集在し、県内有数の群集墳密集地（能美古墳群）となっている。

また、能美丘陵の南へ連なる、小松丘陵には、総数200基を超える窯跡（古墳時代～中世）が所在（南加賀古窯跡群）している、本窯跡もその一部をなすものと考えてよい。

II 調査経過

今回の調査は、金沢市有松から加賀市箱宮までを結ぶ加賀産業道路の一部として、能美郡辰口町地内に新設される大型農免農道の新設工事にともなって行われた緊急発掘調査である。昭和48年5月9日。耕地建設課から事前協議を受けた県教委文化財保護課は、5月19日に予定路線内の現地調査を行なった。その結果4地点にわたって遺跡の存在を確認したので、直ちに耕地建設課に報告した。その際4地点については、地表観察だけでは不十分であり、試掘調査を行なった上で、再度協議したい旨申し入れ、6月15日～18日の4日間にわたる試掘調査を行なったのである。この試掘により4地点のうち1箇所は平安期の窯跡であり、他の1箇所は中世陶質土器包含層であることを確認した。その他の地点では、路線内にまで遺跡が延びていない事が判明した。岩内茶仙堂遺跡（中世墓地）と名付けた地点については昭和48年度事業として、すでに調査を行なっており、本サクラマチ古窯跡の調査は昭和49年度事業として行ったものである。

岩内茶仙堂遺跡の調査では、珠洲焼・加賀古陶などの中世遺物を検出したが、五輪塔の部分も発見されており中世墓に関するものと想定された。しかし、埋葬構造などは認めることができず、おそらく上部台地から崩れてきた二次的堆積層であろうと判断した。したがって、遺跡中心部は、路線外の台地上部に存在することになり、当該地にまで調査の範囲に含めなかった。



第2図 辰口町サクラマチ古窯跡地形測量図

昭和49年3月11日、文化財保護課と耕地建設課との間で再度の協議を行い、4月中旬に調査を開始するとともに、これと並行して、周辺地帯の遺跡分布調査を実施し、6月初旬までには調査を完了することで双方の合意がなされた。このとり決めにしたがい昭和49年4月15日から発掘調査を開始することになったのである。

昭和49年に実施した試掘調査では、窯壁断片と須恵器片若干を検出しただけで、正確な窯体位置まで確認していなかったため、まず、窯体の位置・基数を探査するため、予定路線内の北側斜面約300m²を調査範囲に定めるとともに、等高線に並行する、幅2mのトレンチを設定し調査を開始した。

その結果、予定路線内に窯跡3基の存在が確認され、西側より順次サクラマチ第1号、2号、3号窯跡と命名した。窯体を築いた地形は、第2図に示したとおり標高83mの等高線を境として、その北側では急激に傾斜がゆるくなってしまっており、かなり削平されていることを物語っていた。付近の住民の話からも、当該地はかつて畠地として削平開墾したことであった。台地北端の崖部も、昭和初期の耕地整備事業によって削り取られたもので、もとの丘陵裾線は、現在よりもさらに30m程度北方へ延びていたようである。

III 窯体構造とその他の遺構

本窯跡では、3基の窯とピット状遺構1基の検出をみたが、第2・3号窯は残存状態が悪く、開墾などによる削平でかなり破壊されたものと考えられた。以下1号窯から順に遺構の状態を略述したい。

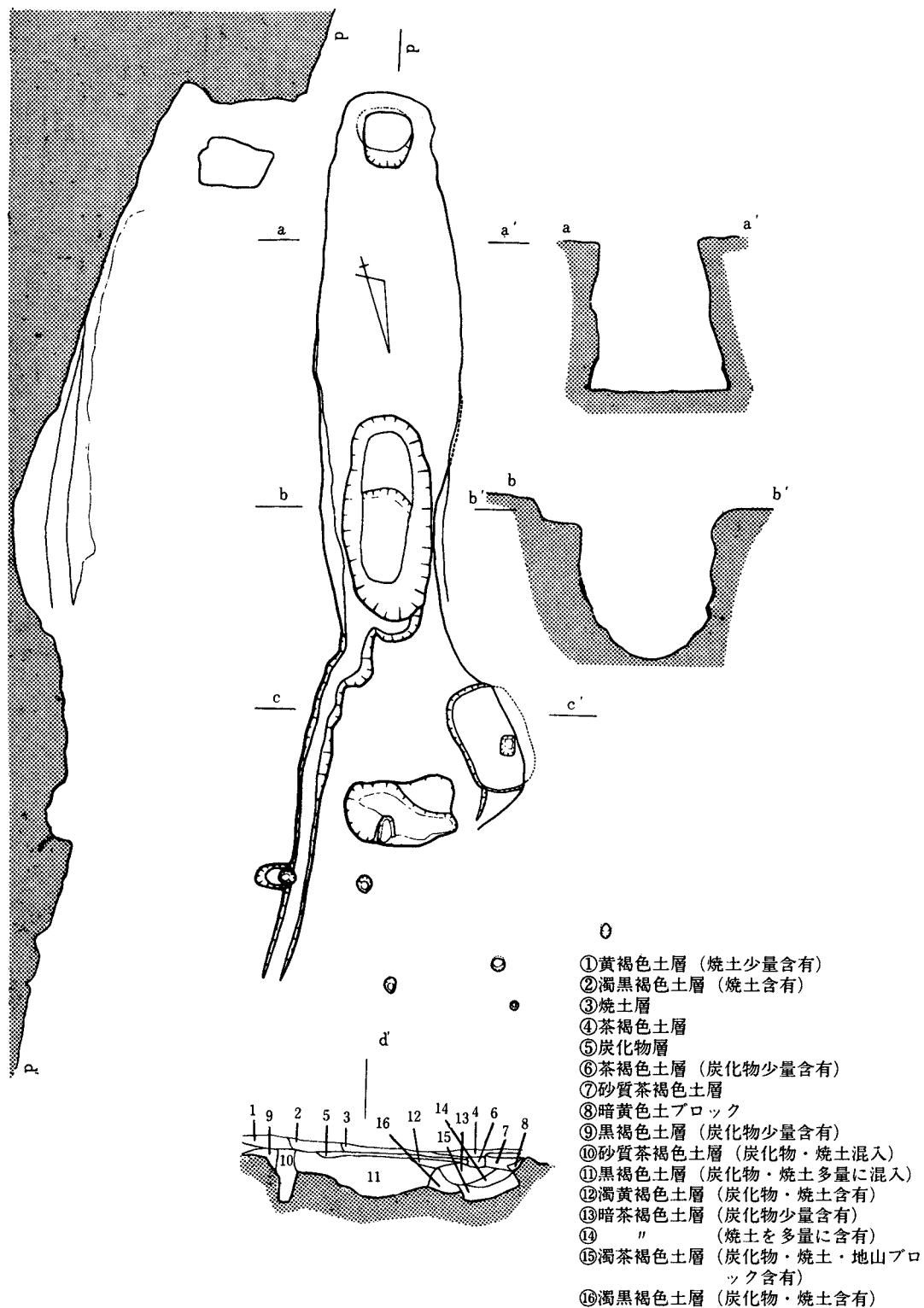
(1) 第1号窯（第3図）

3基の窯跡の中では、最っとも残りがよく、煙道付近の天井も完全に残っていた。しかし、灰原部は認められなかった。

窯体は等高線に直交して構築されるが、主軸を北17度東に置く半地下式無階無段登窯であった。煙道部を除いて天井部はすでに陥没していたが、窯体の現在長9.2mを測り、幅は前庭部で2.8m、焚口部で1.2m、焼成室最大幅で1.8m、煙道部で1.2mを測る。したがって、焼成室中央でやや胴の張ったプランとなっている。窯床面の傾斜は焼成室で25度を計るが、煙道部下では30度とやや傾斜を強める。煙道は垂直に立ち上がり1.7mの高さまで残存しており、構築当時の値とほぼ近いものと考えられる。煙道は下端で東西70cm×南北50cmの楕円形を呈するが、上端では東西60cm、南北70cmの隅円方形プランを呈する。焼成室は胴にややふくらみをもった長方形で、床面には壺・蓋・甕などが隙間なく並べられていた。側壁は東側で40cm、西側で30cm程残っており、スサ混りの粘土を地山（黄褐色粘質土）に貼りついている。燃焼室部には長さ2.5m、幅1.1mの長楕円形プランをなすいわゆる攻め焚き用とみられる船底状のピットが認められた。ピット内には焼土と炭化物を多量に含んだ濁黄褐色土が層をなしていた。また、焚口部東側から前庭部東側には、燃焼室の舟底状ピットから延びる幅30cm、深さ30cmの凹形の溝が掘られていた。おそらく排水施設であろう。さらに、前庭部中央と西側壁下には1.3×0.8m、0.9×1.4mの楕円形プランをとるピットが認められ、焼成作業や残灰処理などのため設けられたものと考えられる。特に、西側にあったピットの底部中央には一辺20cmの方形ピットがあり、前庭部西壁がその上を被覆し袋状となっている。なお、前庭部北側には径10cm前後的小ピットが数個認められたが、これらに柱穴とすべき規則性は認められず、前庭部に覆屋などの施設があったという積極的な証拠を得ることはできなかった。なお、本窯の前庭部北側では地山が急激に落ち込み、表土の流れ込みがみられる。灰原を発見できなかったのはそのためであり、すでに開墾などの削平によって消滅したものと考えられる。

(2) 第2号窯（第4図）

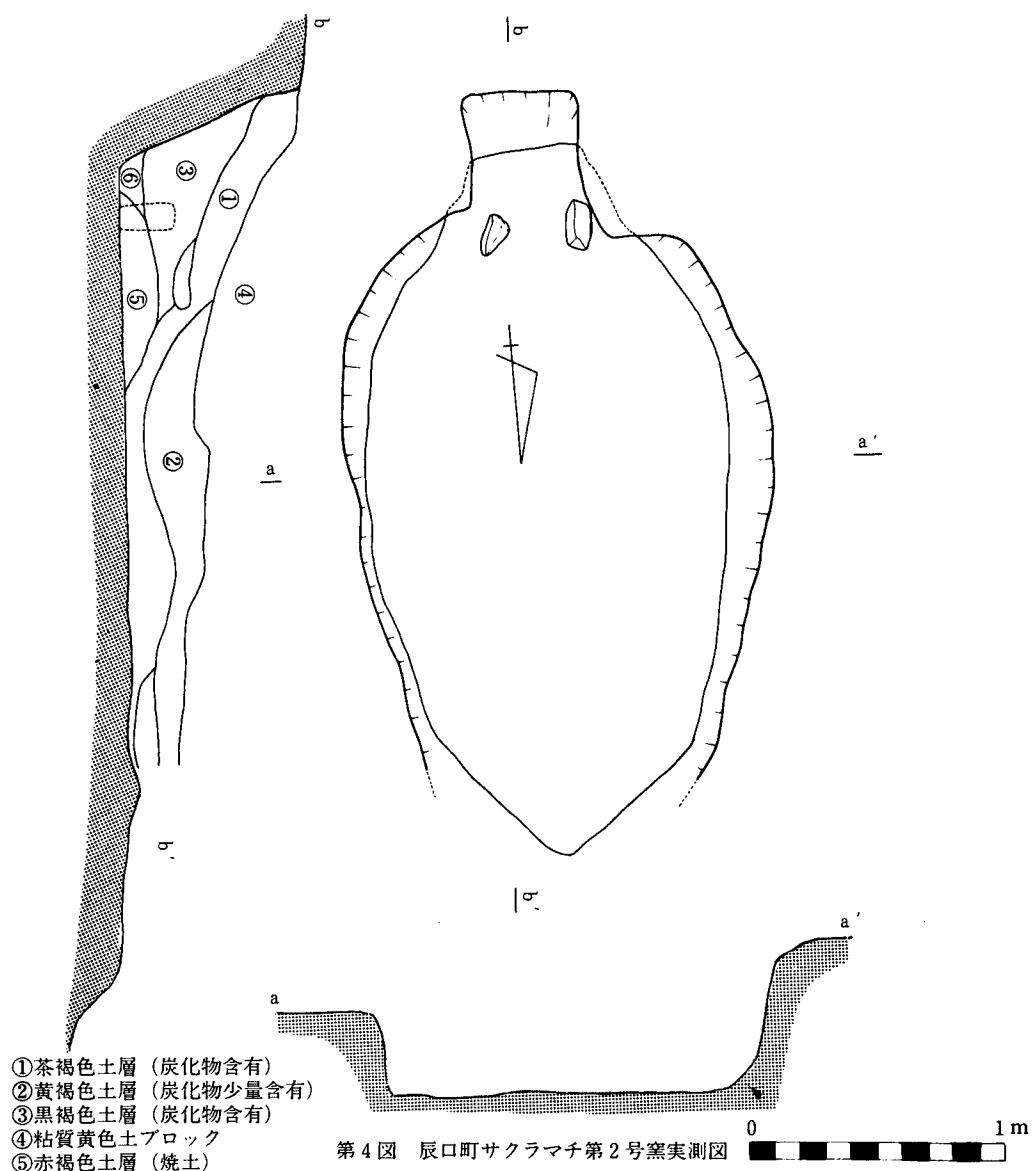
第1号窯の東側約10mの位置にあり、等高線に直交して構築している。主軸は北5度西にあり、現地表下30~70cmで窯底面にいたる。天井部はすべて陥没しており、焚口部も残存しない。現在長は3.05mを測り、窯体幅は、煙道より焚口部方向へ3.0m地点で1.0m、同じく1.3m地点で1.75mを測ったが、この部分で焼成室の最大幅となっている。煙道部は、45×45cmの方形



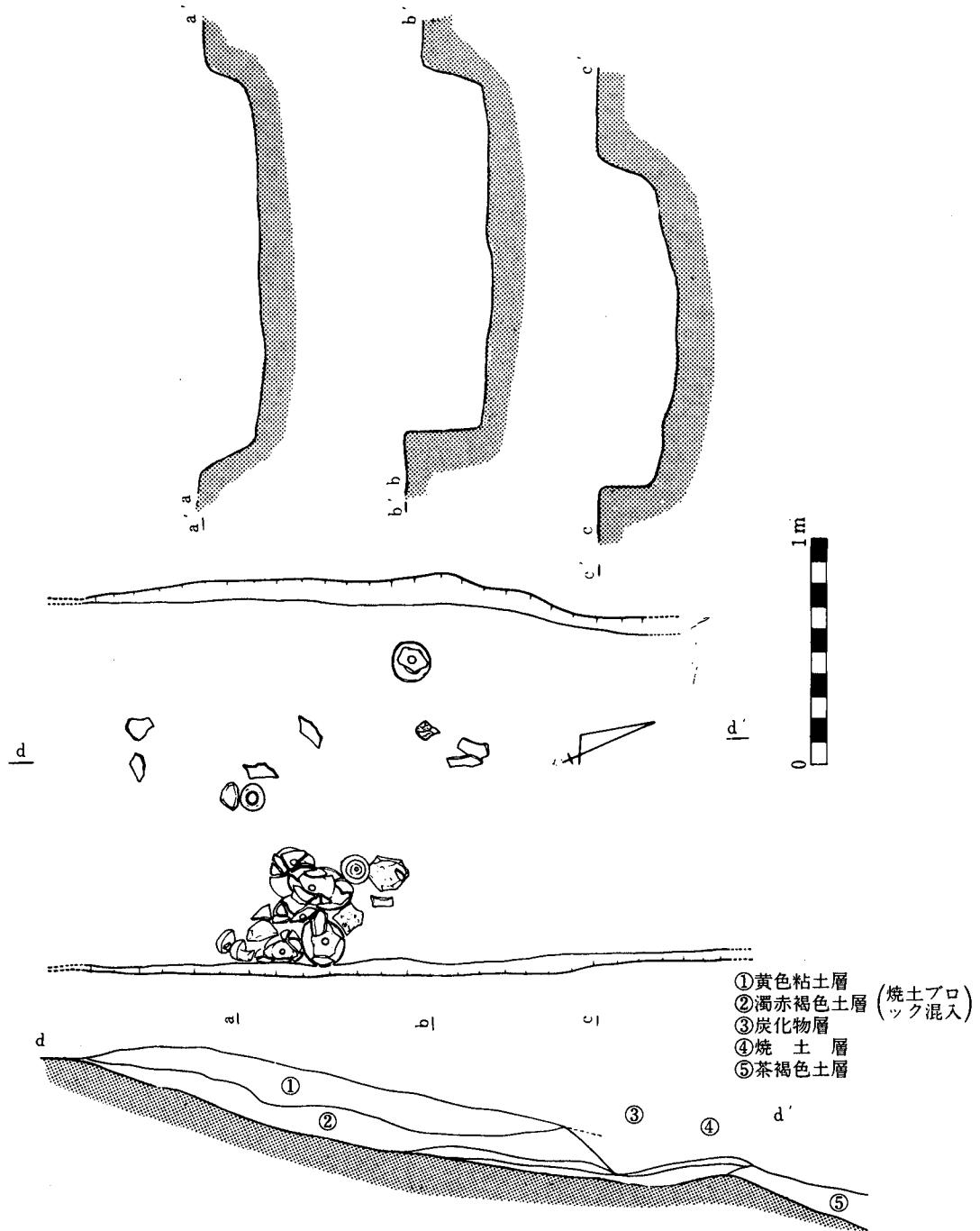
第3図 辰口町サクラマチ第1号窯実測図

0 2 m

プランを呈し、現存高長 70 cm を測る。床面からの立ち上がりは、北方向へ 26 度の傾斜を有する。また、本窯にみられる最も大きな特徴として窯床がほぼ水平面をなす平窯であった点である。さらに、煙道部付近には左右 1 対の石柱が残存しており、この石柱によって焼成室部と煙道部とが明瞭に区切られている。県下で窯内に石柱を備えた類例はないが、古墳時代の登窯では煙道部に礫を配した例があり、本例もこれと関連するものかも知れない。また、平窯であるが故に、登窯の如く焼成室内の温度が上昇しにくく、高温を維持するための機能をもったものとも考えられるが、現時点では、速断することは避けておきたい。また、県内の平窯の例としては、南加賀古窯跡群の一角をしめる小松市戸津古窯跡群中にその存在が知られており、本例と同様出土土器のないことやその規模などに類似点をみるが、石柱の有無や煙道が窯尻と、焼成室の横から岩壁をく



り抜いて作られている点で本例との間に形態上の相違点もあり、同一視するのは危険である。また、窯壁は、粘土を貼り付けたものであったが、亀甲状の亀裂が認められるほか、熱で溶けている部分もあり、かなり焼き込まれていることを示していた。窯体内部の土層には、焼土と炭化物が多量に含まれていたが、出土遺物は皆無であった。しかしながら、本例も窯としての機能は備



第5図 辰口町サクラマチ第3号窯実測図

えており、床面および側壁の状況からみて、長時間にわたってかなりの高温を受けていることは否定できず何かを焼成した遺構であることは疑いのないところである。ここでは、灰原を失っているが、焼成室からの出土土器が無かったことや、窯体の特異な構造・炭化物の存在などから、何んらかのものを焼いた窯跡とし、その性格については、今後の類例にまちたい。なお、本窯上部には、図版IV 5、6 に示したように、南北 1.2 m、東西 1.1 m の範囲に小礫を積んだ石組状遺構（方形・厚さ 20 cm）が存在したことも付記しておく。

(3) 第3号窯（第5図）

第2号窯の東方 4 m を距てて位置する。主軸は北 22 度東を指向し、焼成室は長方形プランをなし、最大幅 1.75 m を測る。東西の窯壁は、5 cm 程度を残すだけで灰原・焚口・煙道・天井部はすでに破壊されて、築構時の窯体規模は不明である。現存長 2.8 m、焼成室床面傾斜角 18 度を測り第1号窯と同様半地下式無階無段登窯だったと推定される。なお、現存する窯体の北端から窯尻方向にかけての約 60 cm の範囲では床面傾斜が約 7 度下がっており、この部分が焚口部に近いことを示していると考えられ、炭化物と焼土層の堆積も認められた。本窯からは壺・蓋・甕・平瓶・薬壺などの器種が、窯詰めした時の状態で東側壁下に並んで検出されたが、壁面および床面とも長時間にわたって高温を受けた痕跡は見られず、第1回目の焼成中に崩壊してしまったと考えられる。出土遺物のすべてが未焼成の状態であり、完全に焼き上げられたものは出土しなかった。

(4) ピット状遺構

第2号窯の東に隣接するほぼ正円形のもので、その規模は直径 1.5 m で地山面から 50 cm の深さに掘り込んでいた。ピット内の充土には、炭化物やブロック状の焼土が多量に含まれているが、壁面と床面は黄褐色を呈する地山のままで、火を受けた痕跡は認められず、ピット内からの出土遺物も皆無であった。2号窯に隣接するところから、それとの関連を想起させるが、現時点では性格不明のピット状遺構とし、今後の検討にまちたい。

IV 出土遺物

(1) 第1号窯出土土器（第6、7図）

出土した土器の器種としては、壺・蓋・甕が大部分を占め、その他の器種としては、わずかに双耳瓶の耳部が2点出土しただけであった。なお、遺物はすべて焼成室内から発見された。

蓋（第6図 1～10）

色調は灰色ないしは暗灰色を呈し、胎土に微砂粒を含むものもある。口縁端部を内側に折り曲げているため、口端部外側に稜線ができるが、この部分で最大径となっている。口端部内面の返りはなく、天井部には、扁平な宝珠形つまみが貼り付けられる。蓋径の大きさではほぼ2群に分類できる。第6図 1～6 では 15.7～15.8 cm を計り、7～10 は 16.3～16.6 cm を計る。内外面と

も横ナデ調整を行なっており、天井部にヘラ削り手法を用いているもの(4、6、10)もあった。

坏(第6図11~42)

出土土器でもっとも多かったのは坏である。器形的には、高台のないものと付くものとの2種類に大別できる。高台のないものをI類、高台付きのものをII類とし、それぞれ口縁部径の小さいものから順にa、b、c、dに細分できる。

I—a(第6図11~18)

口縁部径が13cm台のもので、器高は2.6~3.3cmを計る。底部はヘラ切り未調整で、口縁部は内外面ともに横ナデ調整しているが、立ち上がり部分の外側にはヘラによる調整痕を残すもの(18)もある。口縁部はゆるく外反する。

I—b(第6図19~30)

口縁部径が14cm台で、器高は2.7~3.6cmを計る。口縁部はI—aと同様ゆるく外反するが、(30)のようにやや内屈するものや、(20)のように口縁端部で強く外反するものもある。底部はヘラ切り未調整で、口縁部内外面には横ナデ調整が行なわれている。

I—c(第6図31)

口縁部径が15cmを計るもので、底部はヘラ切り未調整、口縁部は内外面ともに横ナデ調整を施している。立ち上がりはゆるく外反する。

I—d(第6図32、33)

口縁部径16cm以上のもので、底部はヘラ切り未調整、口縁部は内外面とも横ナデ調整を行う、(32)のごとく口縁部が強く外反するものも認められる。

II—a(第6図34)

口縁部径13.3cm、器高3.6cmを計る。胎土・焼成とともに良好。口縁部はゆるく外反し底部はヘラ切り未調整、高台は貼り付けで外側につよくはり出し、その高さ4mmを計る。

II—b(第6図35~37)

口縁部径は14.3~14.6cm、器高3.6~3.8cmを計る。底部はヘラ切り未調整で、貼り付け高台である。口縁部は内外面とも横ナデ調整を行ない、ゆるく外反する。

II—c(第6図38~41)

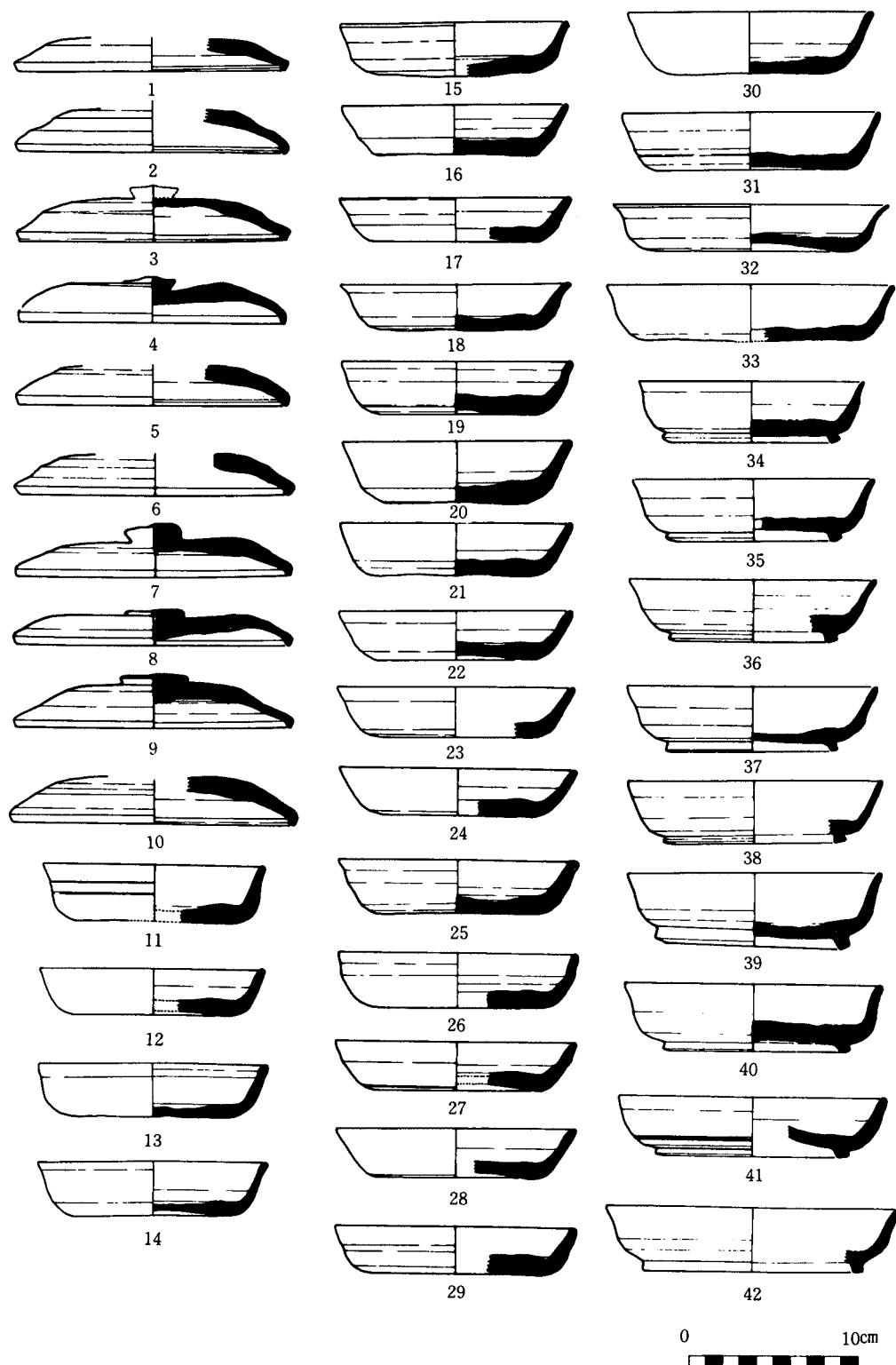
口縁部径が15cm台のもので、口縁部立ち上がりはゆるく外反する。底部はヘラ切り未調整で、口縁部内外面とも横ナデ調整を行なっている。

II—d(第6図42)

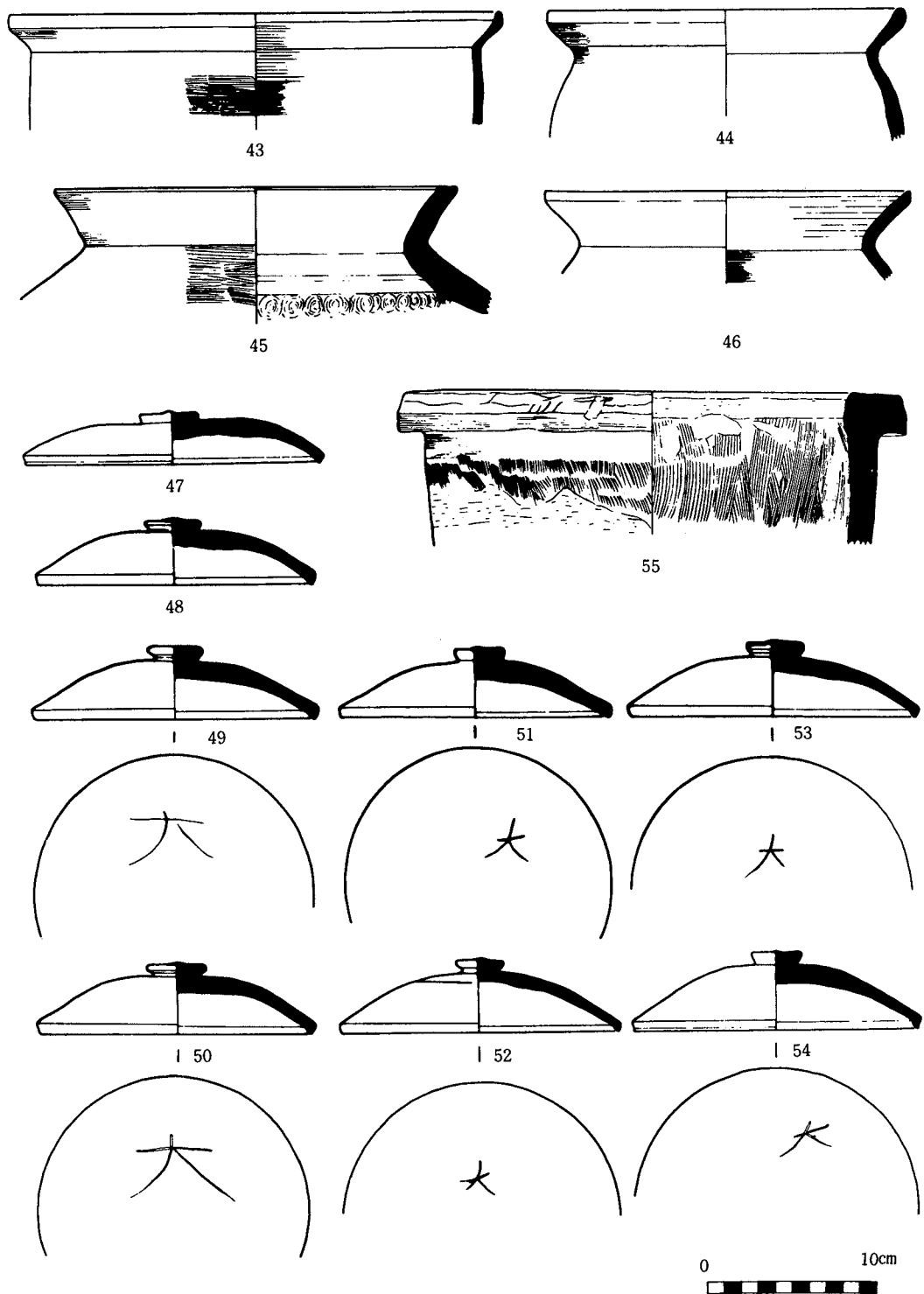
口縁部径が16cm以上のもので、42では17.3cm、器高3.9cmを計る。高さ5mmの高台は貼り付けでやや外側にはり出し、口縁部は内外面とも横ナデ調整が行なわれゆるく外反する。

b) 第3号窯出土土器(第7、8図)

本窯出土の土器は、焼成室内出土のものであるが、そのうち床面に並らべられていた完形品を



第6図 サクラマチ第1号窯出土須恵器

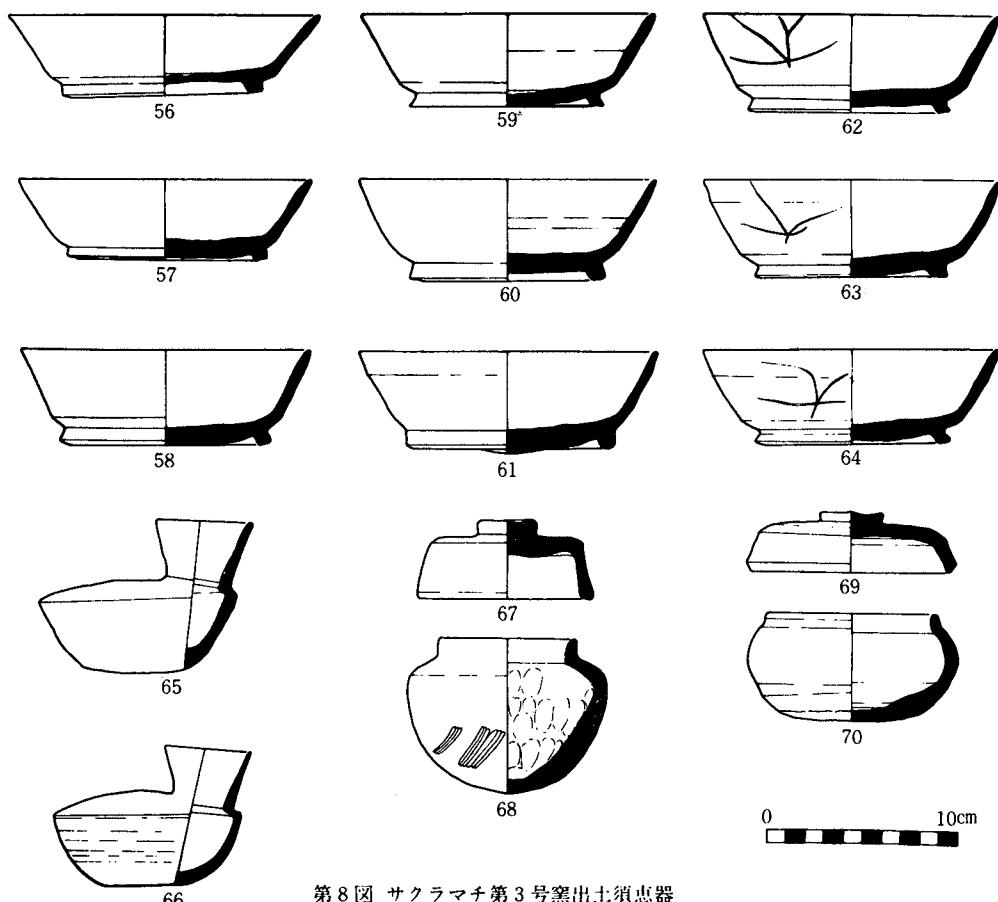


第7図 サクラマチ第1号窯出土須恵器（43～46）
サクラマチ第3号窯出土須恵器（47～55）

選んで図示した。土器はすべて生焼のものであった。

蓋（第7図 47~54）

口端内側の返りはなく、口縁端部が、やや内側に曲る点でも第1号窯出土の蓋と同様である。天井部には、扁平な宝珠形のつまみを貼り付けてあり、口縁部はいずれも内外面に横ナデ調整を行なっている。口縁径は(47)の17.6cmを除きいずれも16cm台を計り、器高も47の3.1cm以外はすべて4cmとなる。胎土はいずれも良好であった。48~54の裏面には細いヘラで「大」の字が書かれている、いわゆる窯印であろう。



第8図 サクラマチ第3号窯出土須恵器

壺（第8図 56~64）

口縁部径は、(56)の16.2cmを除き他は15cm台を計る。口縁部はゆるく外反し、内外面とも横ナデ調整を施している。器高は、56、57が4.1、4.2cmを計るが、他は5cm前後で、1号窯出土のものよりもやや深くなる。底部はヘラ切りの痕跡をそのままとどめている。なお、62~64の外面には、蓋で見られたものと同様ヘラによって「大」の字が書かれており、59の底部裏面にも同様の「大」の字が認められる。また、(57)の底部裏面には、「井」、「×」が描かれている。

平瓶（第8図65、66）

いずれも高台のつかない小形平瓶で、(65)は口縁径5.0cm、器高7.7cm、胴部最大径10.4cmを計り、(66)は口縁径4.5cm、器高7.3cm、胴部最大径9.8cmを計る。口縁部と胴部では横ナデ調整が行なわれ、底部はヘラ切り未調整である。

薬壺（第8図67～90）

67、69および68、70はそれぞれセットになるものである。(67)は口縁端部がやや外反し、天井部には、扁平な宝珠形のつまみを貼り付けている。口縁部の外面は横ナデ調整が行なわれ、口縁部径9.2cm、器高4.1cmを計る。(68)は壺蓋と同様、口端部で稜線をなしこれが最大径となる。天井部には(67)と同様、扁平な宝珠形のつまみを貼りつけ、口縁部の内外面は、入念に横ナデ調整がなされている。口縁径は10.0cm、器高3.1cmを計り、(67)に比べて扁平な形を呈する。

(69)は短かい口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、肩部で最大径10.5cmを計る。底部は丸底で口縁部内外面とも横ナデ調整が行なわれている。外面胴部下方には、タタキ目整形痕がかすかに残っている。内面には、口縁部下全体に指圧痕を残している。口縁部径7.4cm、器高8.1cmを計る。(70)は、短かい口縁を、やや内傾させ底は平底で、ヘラ切り未調整である。口縁部と胴部の内外面には、非常に入念な横ナデ調整を加えている。口縁径8.8cm、器高5.6cmを計り、(68)に比べて扁平な形を呈する。以上が第3号窯の代表的遺物であるが、他に第7図(55)に示した土器がある。口縁部内径11.5cmを計り、口縁外側に幅1.5cmの横帯を貼り付けている。胴部は口縁部よりほぼ垂直に下がり、外面には細かいクシによる調整とヘラ削りが行なわれる。内面は口縁部がヘラ削り、胴部にはやや太いクシによる調整が行なわれている。胎土には砂粒を含み、生焼の状態である。この器形は類例がなく、用途不明であるが、ここではカマド形の土器としておきたい。

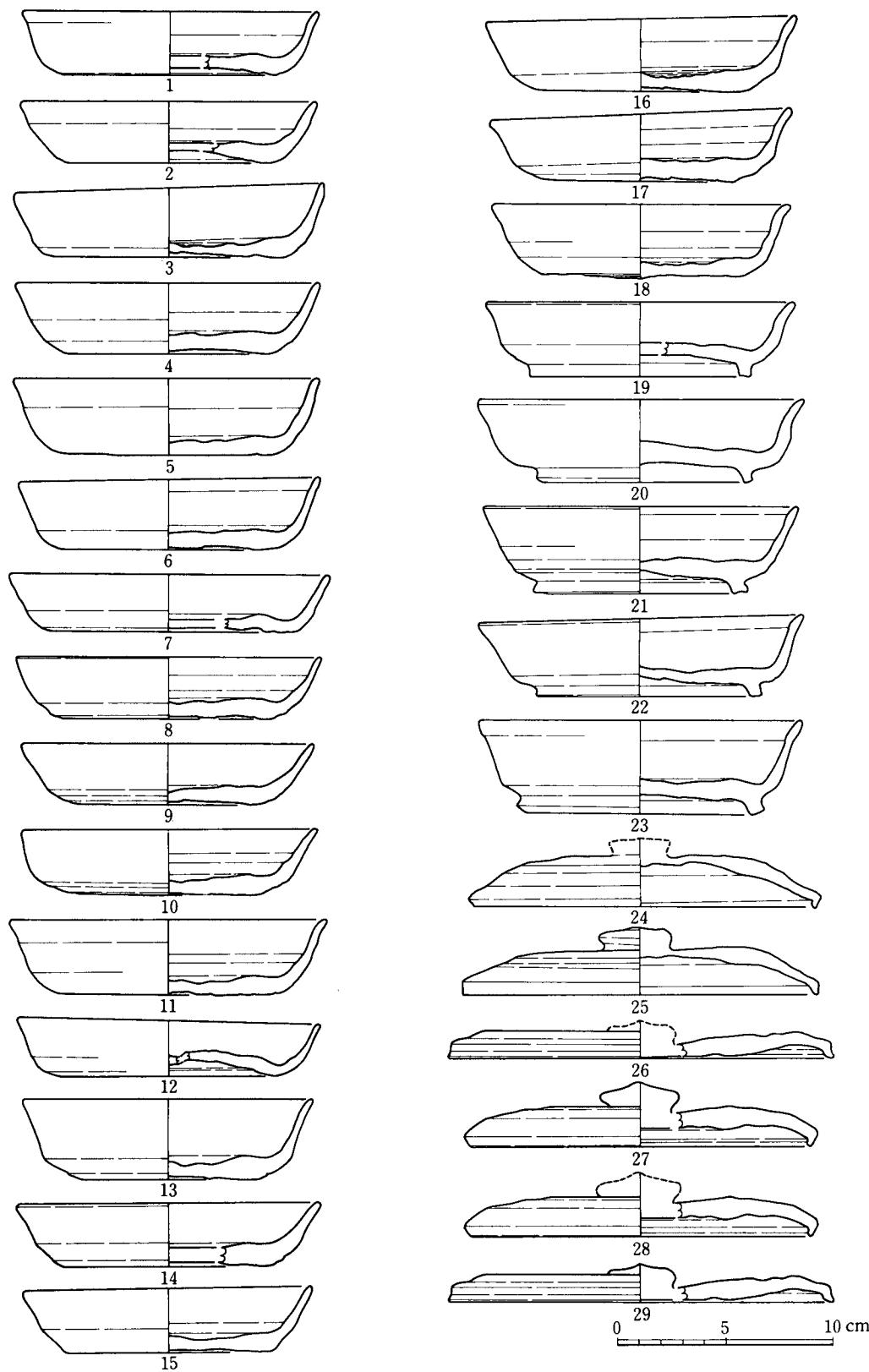
V まとめ

来丸サクラマチ古窯跡は、能美丘陵の北側斜面を利用して構築され、少くとも3基からなる窯跡群であった。その構造は、1・3号が半地下式無段登窯で、2号窯は平窯状の構造をなすものであった。1・3号窯には、焼成室平面プランで差異がみられる。すなわち1号窯ではやや胴部が張るのに対し3号窯では長方形を呈している。また、窯床面の傾斜角でも1号窯の25度に対し3号窯では18度とゆるくなるなど若干の相違を認めることができる。しかしながら、出土した須恵器を見るかぎり、成形技法・調整技法・胎土・器形などに違いを認めることは困難であり、同一型式のものとするのが妥当であろう。本古窯跡の年代については、鹿島郡鳥屋町春木第3号窯出土須恵器と松任市三浦遺跡中層出土の須恵器（和氣第1号窯）との間に位置するものと考えられ、春木第3号窯を奈良前期、三浦中層を奈良末～平安初期とすれば本窯跡出土の須恵器を奈良時代中頃とすることができ、本古窯跡の年代も8世紀中葉頃と想定しておきたい。しかしながら、

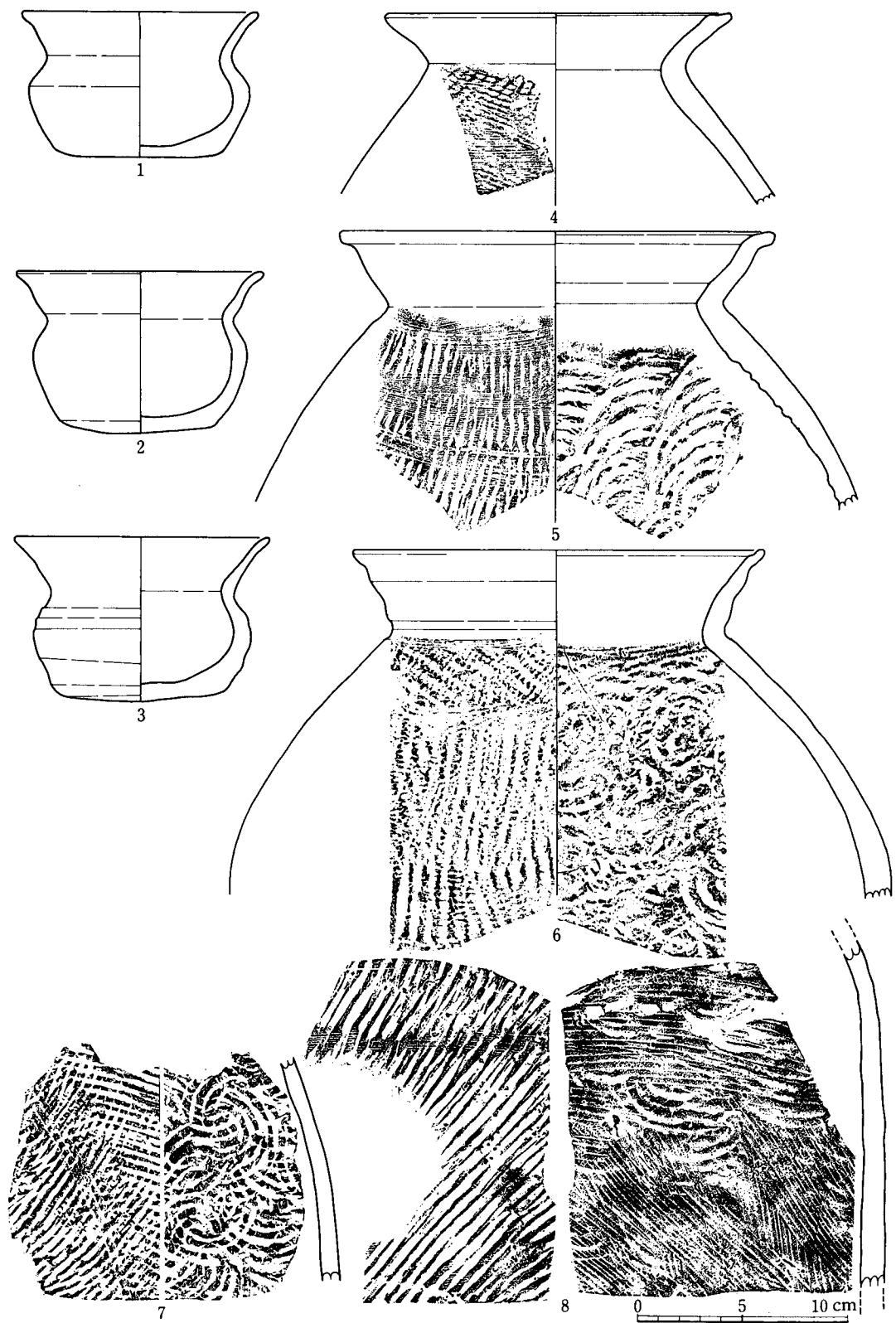
年代決定については、今後の詳細な整理作業を通してさらに検討することにしたい。なお、3号窯出土土器に印された「大」などのヘラ書き文字は、ここで焼かれた製品の供給先を考える場合非常に有力な、傍証資料となるであろう。今後、当該時期の遺跡では、この点に留意することにしたい。

最後に、本調査にあたって、多大の御協力をいただいた辰口町来丸地区有志の方々と、遠路はるばる金沢から調査に参加していただいた金沢市稚日野町有志の方々に謝意を表する次第である。

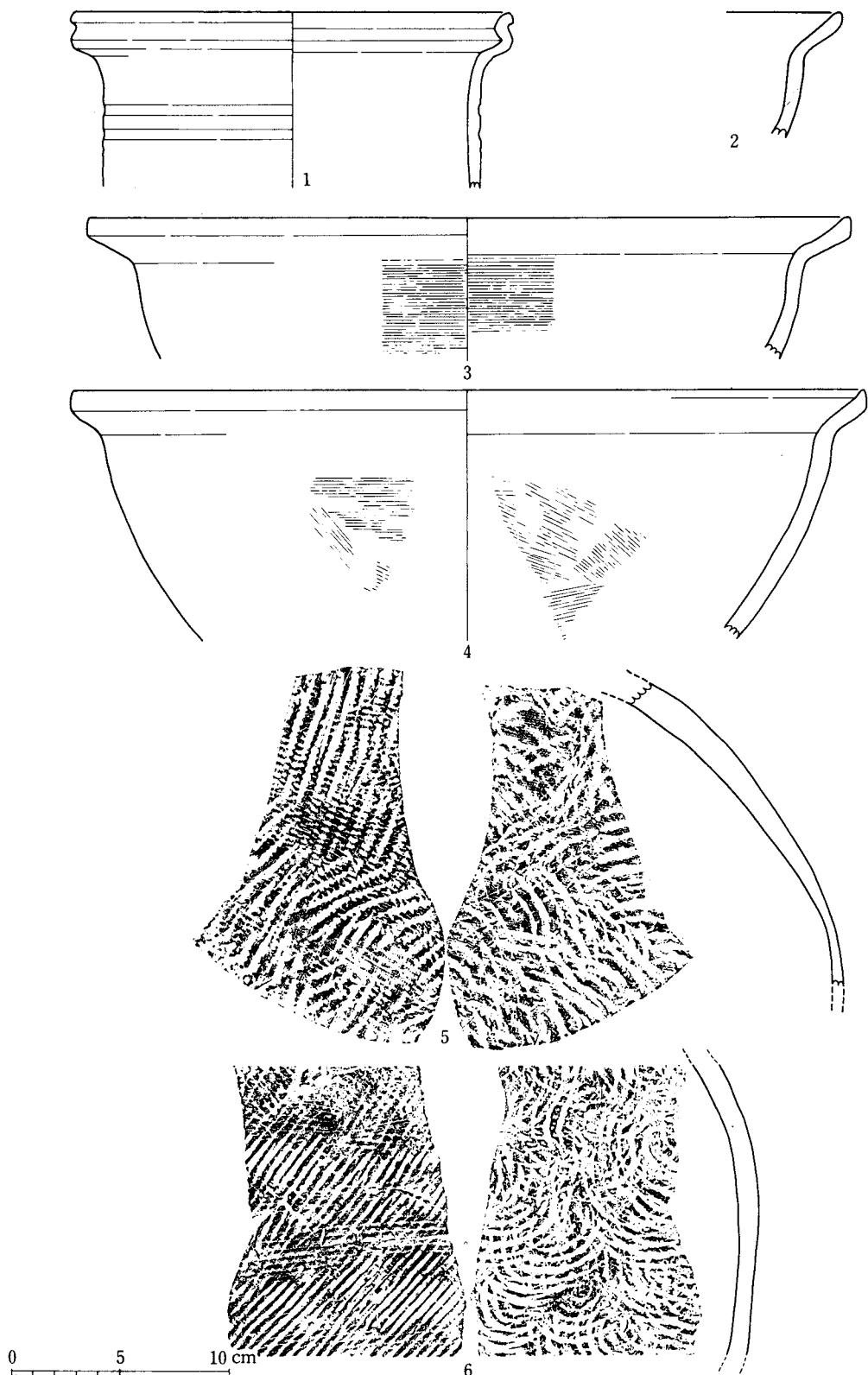
註1 「加賀三浦遺跡の研究」石川考古学研究会刊（昭和42）



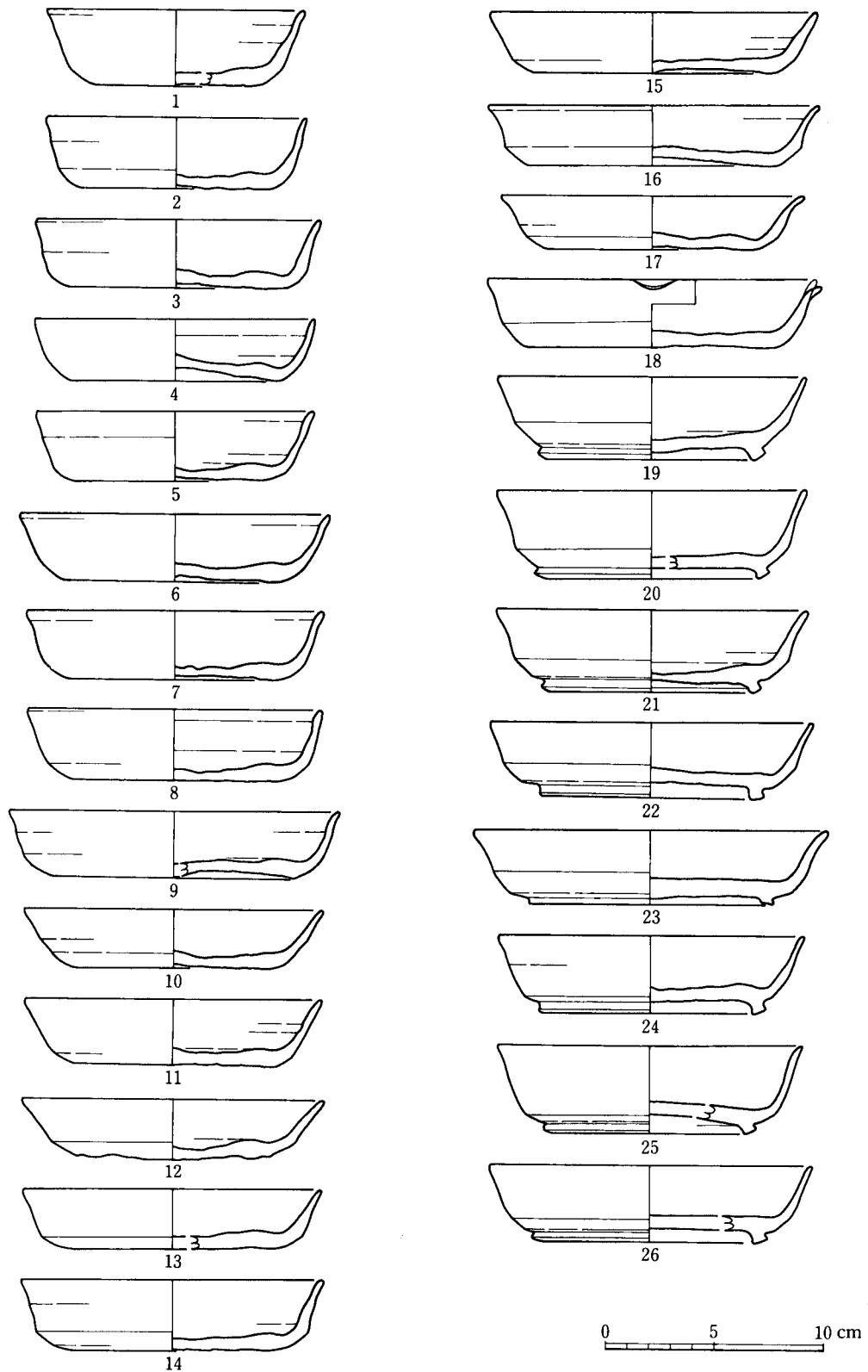
第1図 第1号窯出土須恵器（第1床）



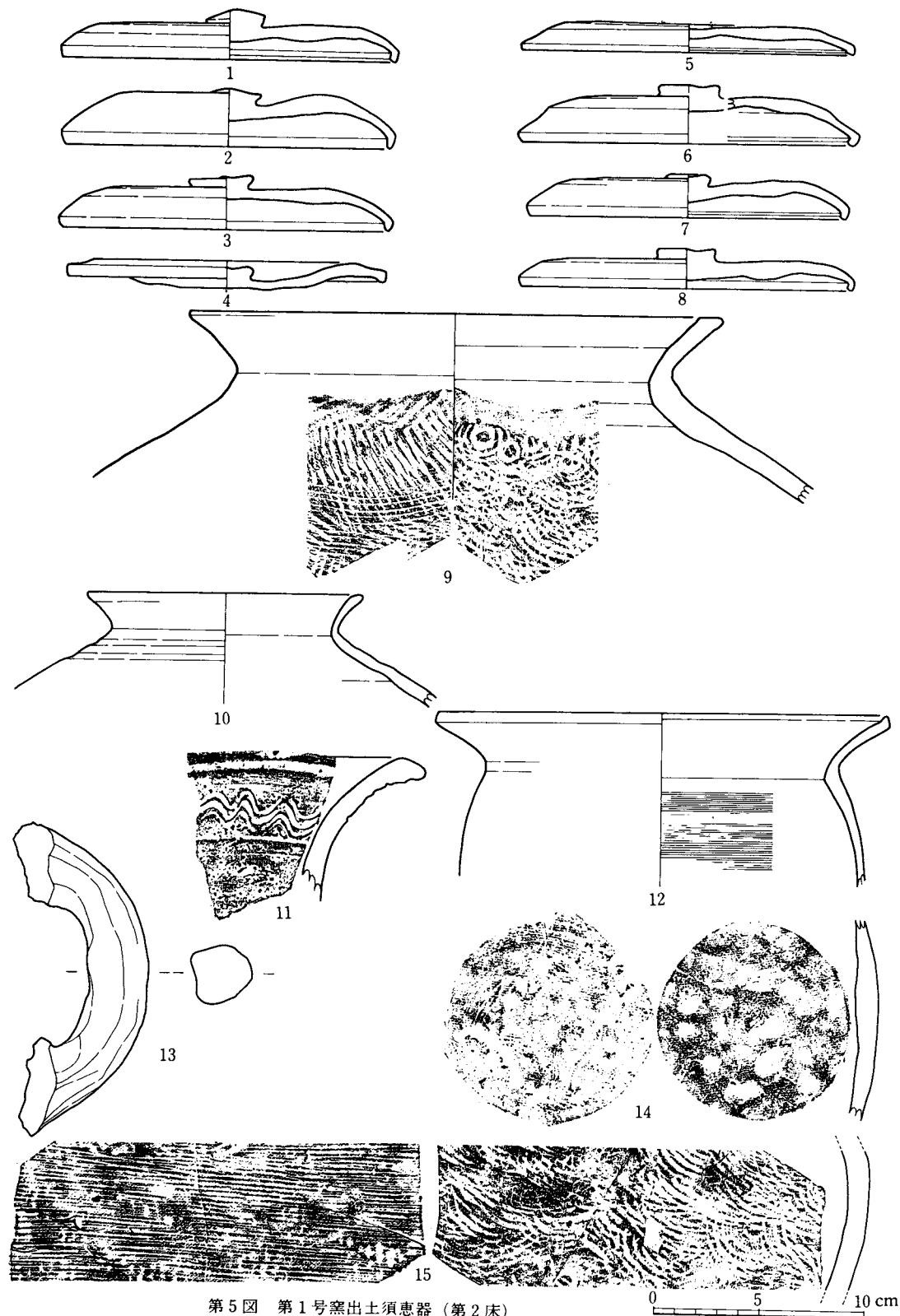
第2図 第1号窯出土須恵器（第1床）



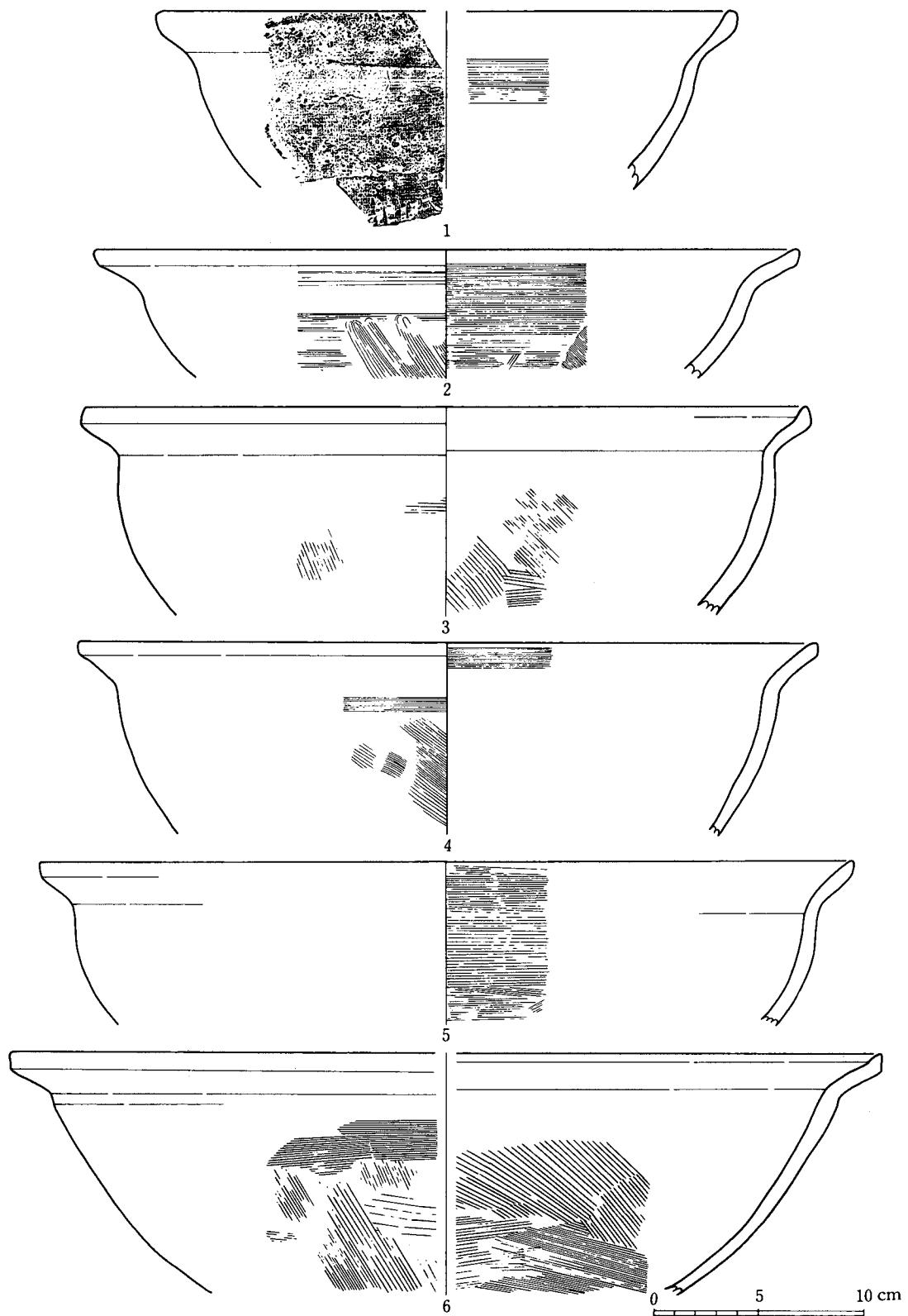
第3図 第1号窯出土須恵器（第1床）



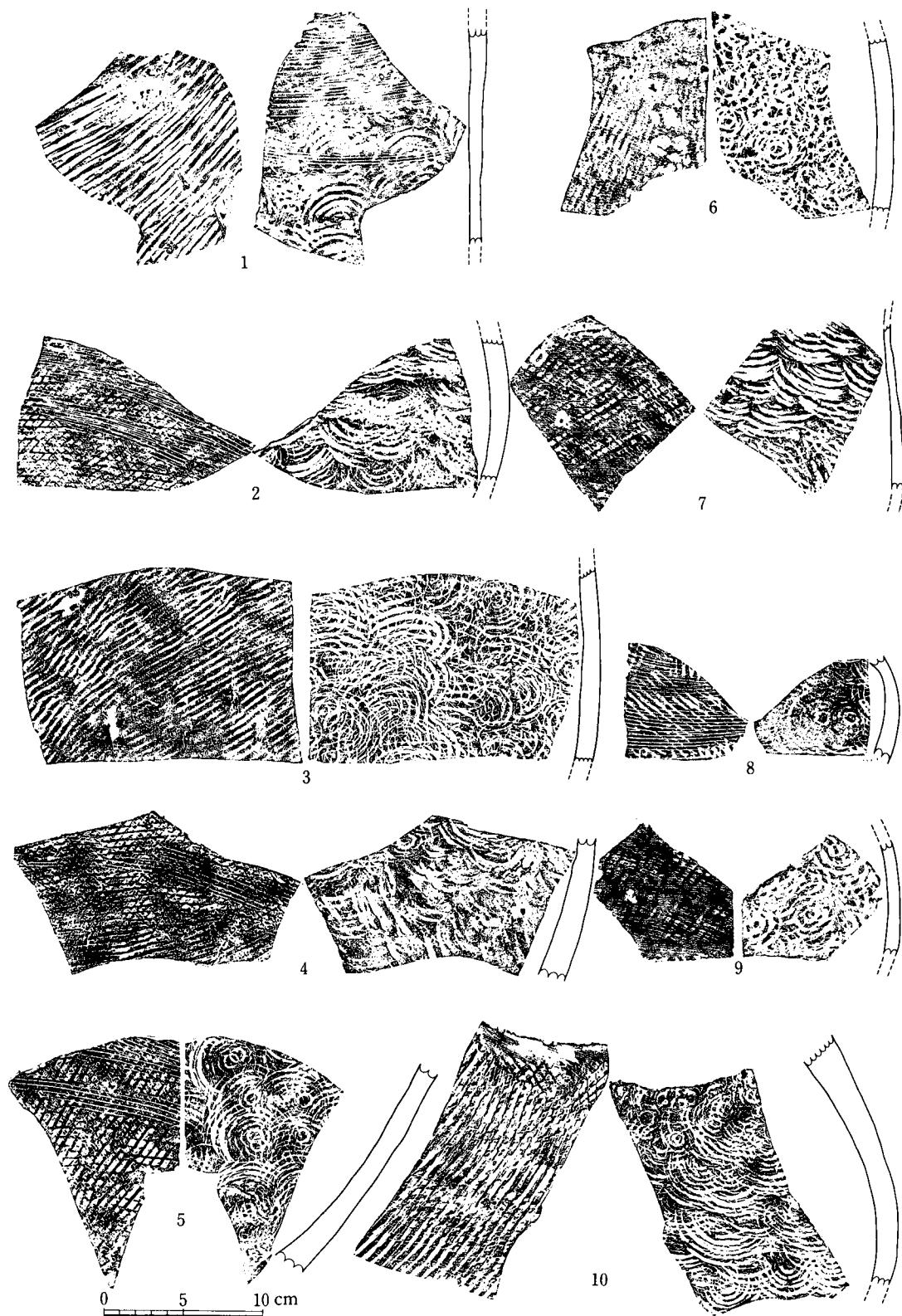
第4図 第1号窯出土須恵器（第2床）



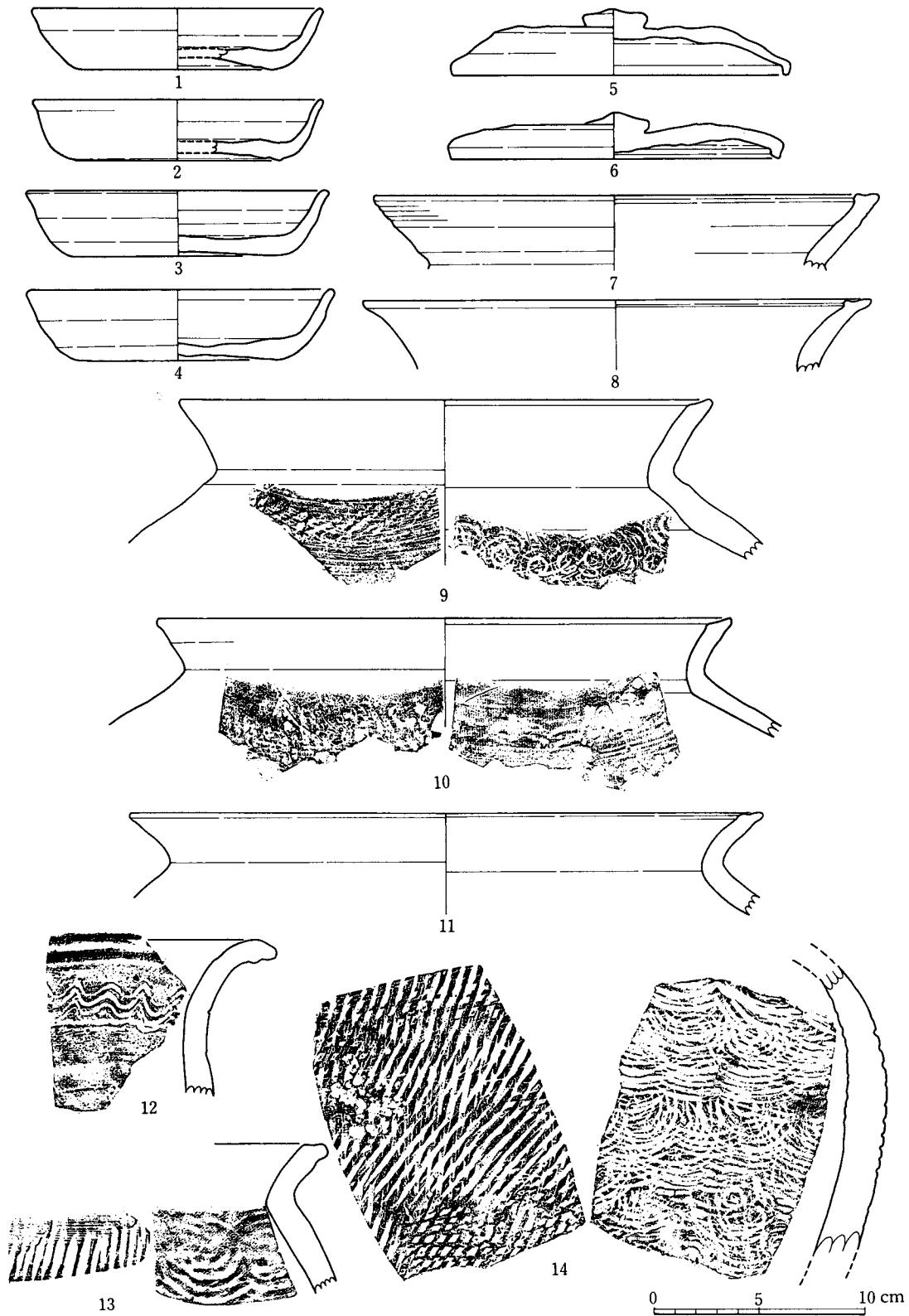
第5図 第1号窯出土須恵器（第2床）



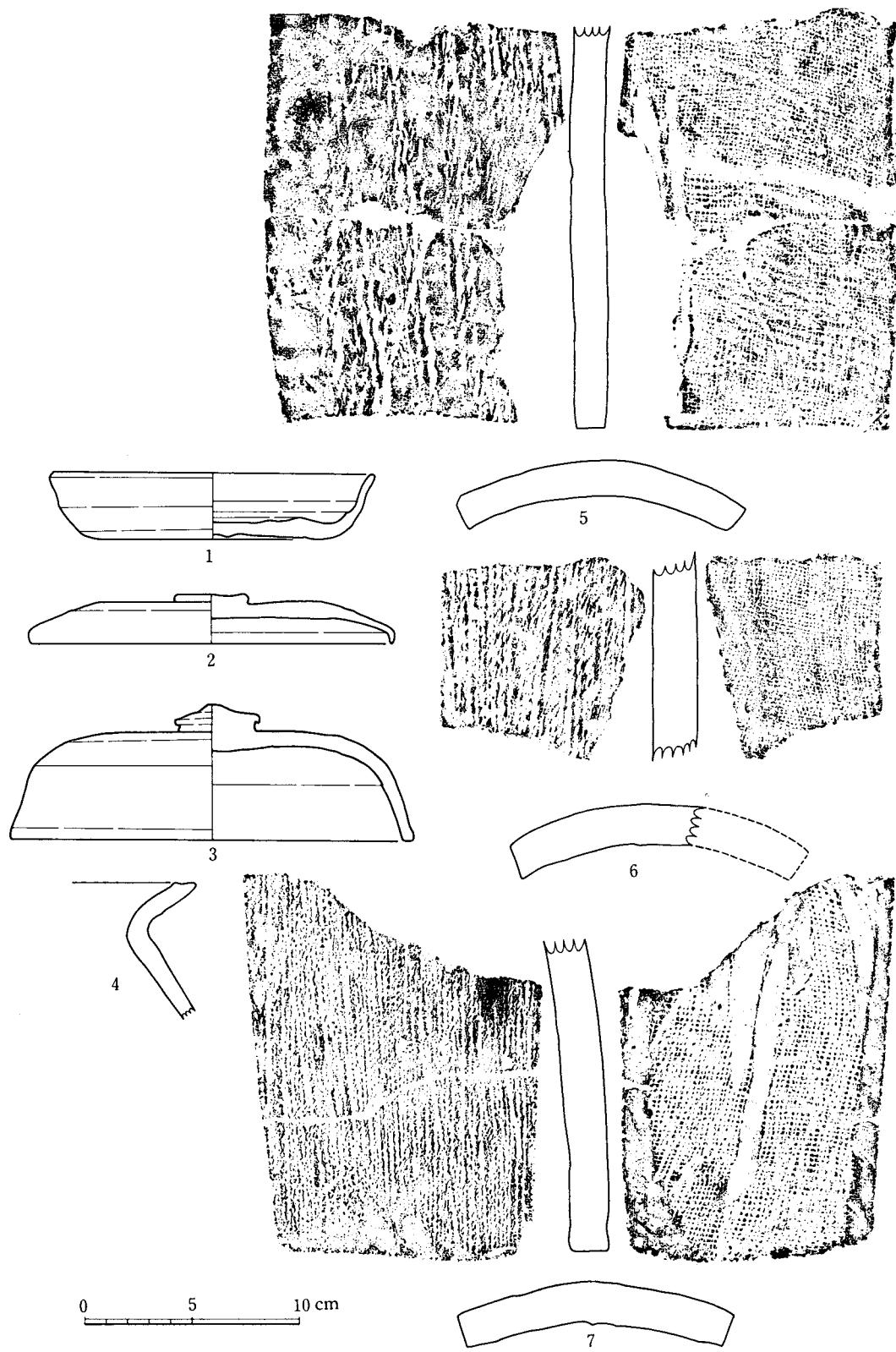
第6図 第1号窯出土須恵器（第2床）



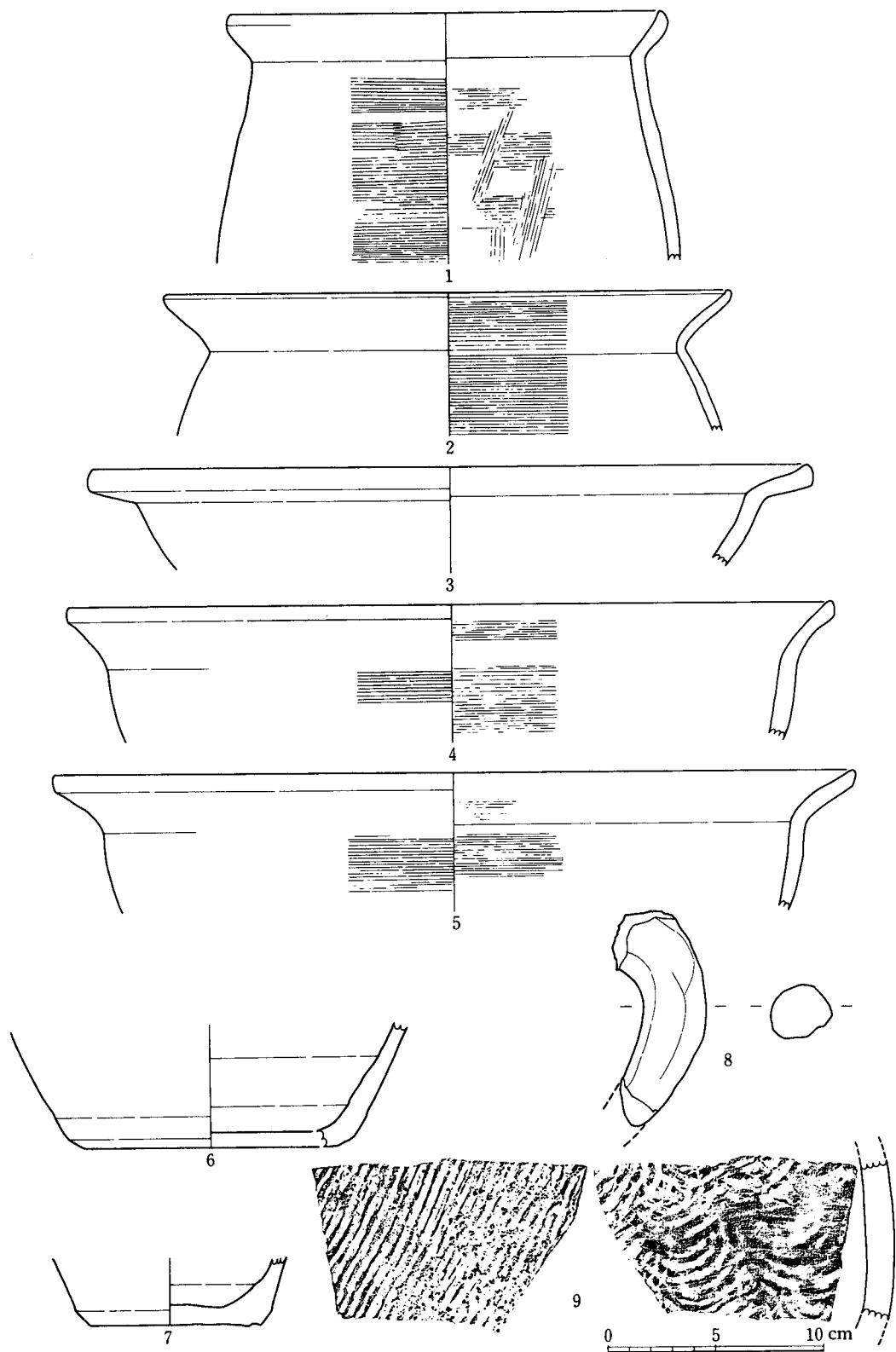
第7図 第1号窯出土須恵器（第2床）



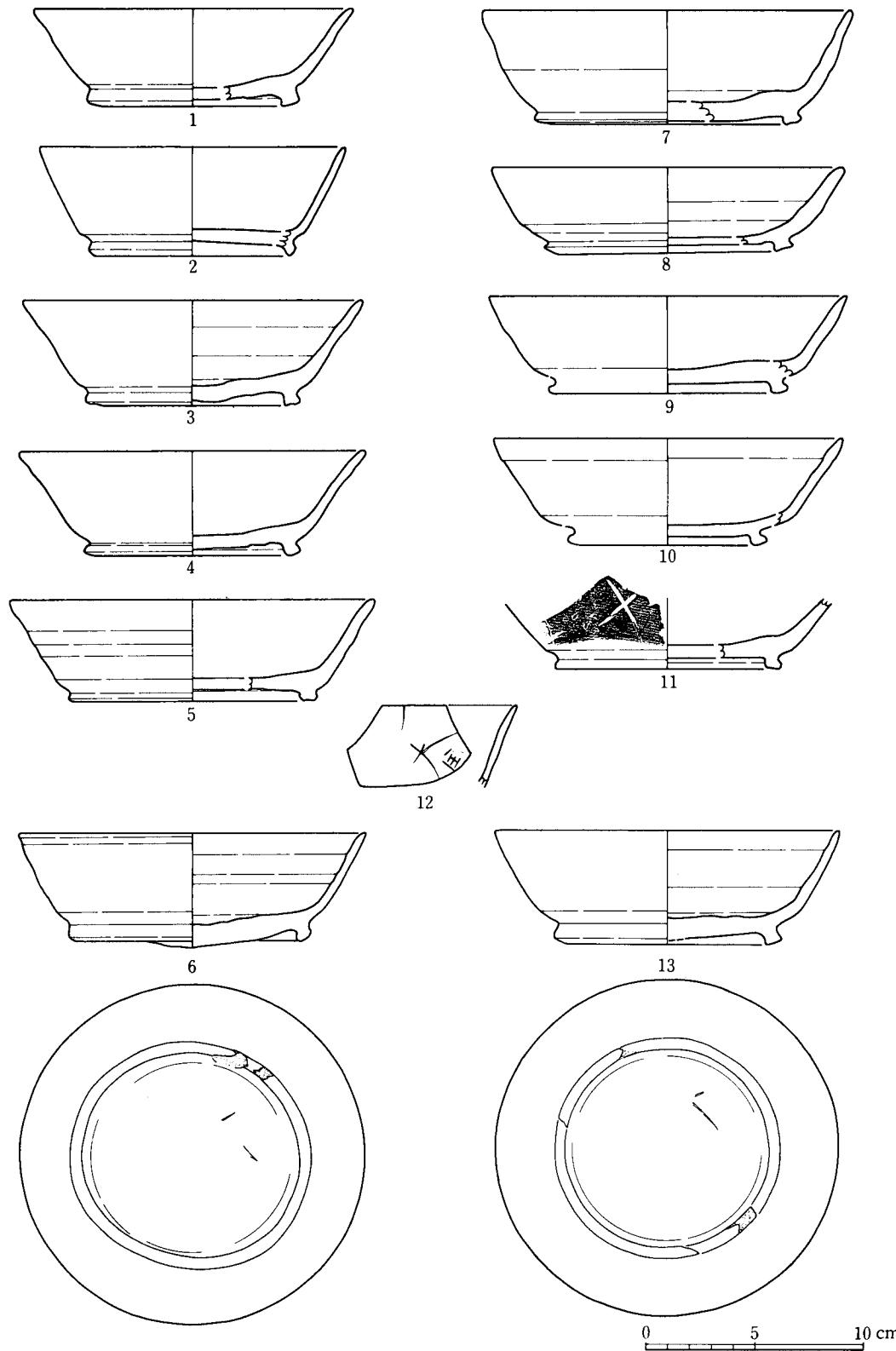
第8図 第1号窯出土須恵器（灰原）



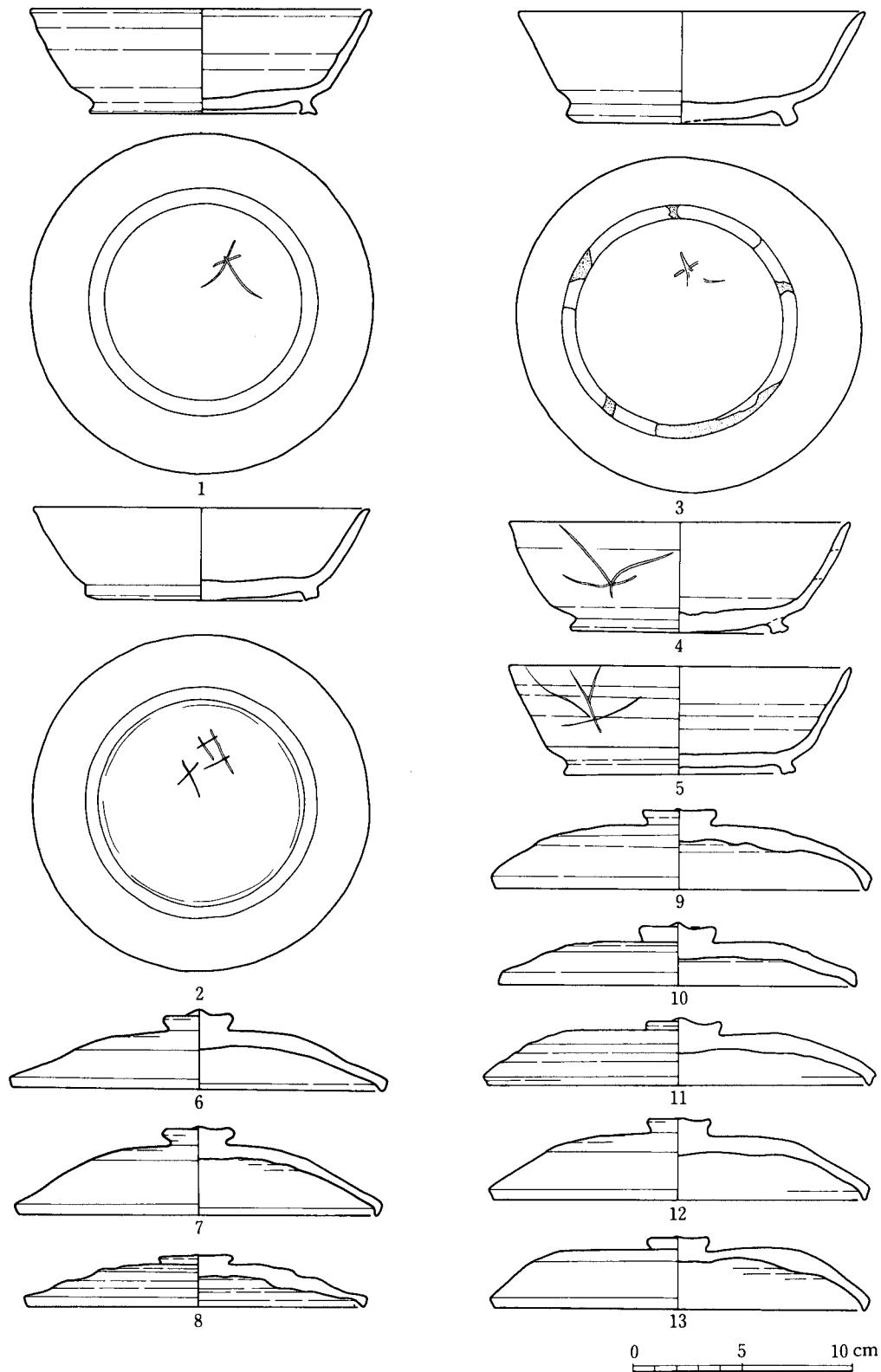
第9図 第1号窯出土須恵器、瓦（灰原）



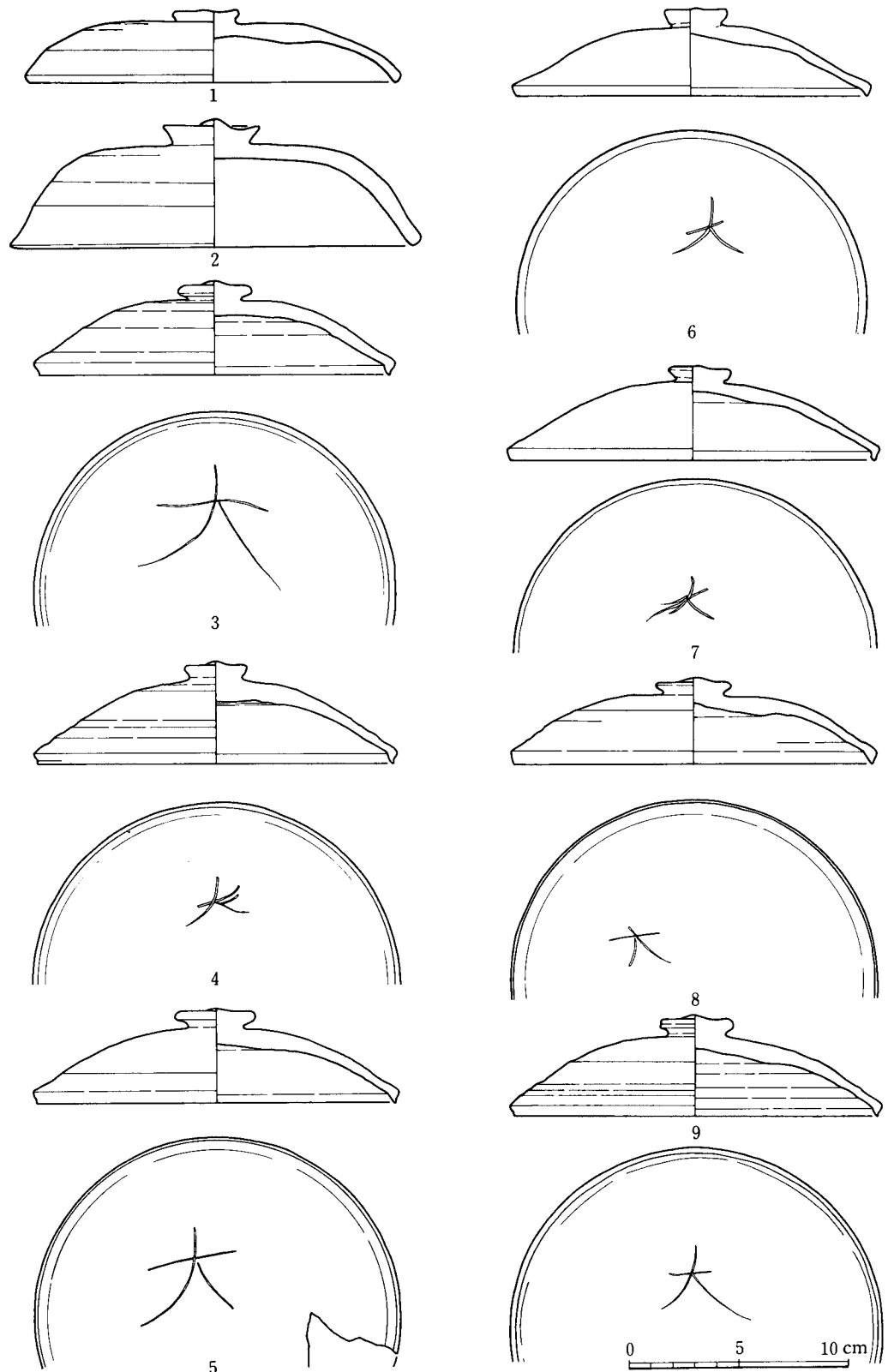
第10図 第1号窯出土須恵器（灰原）



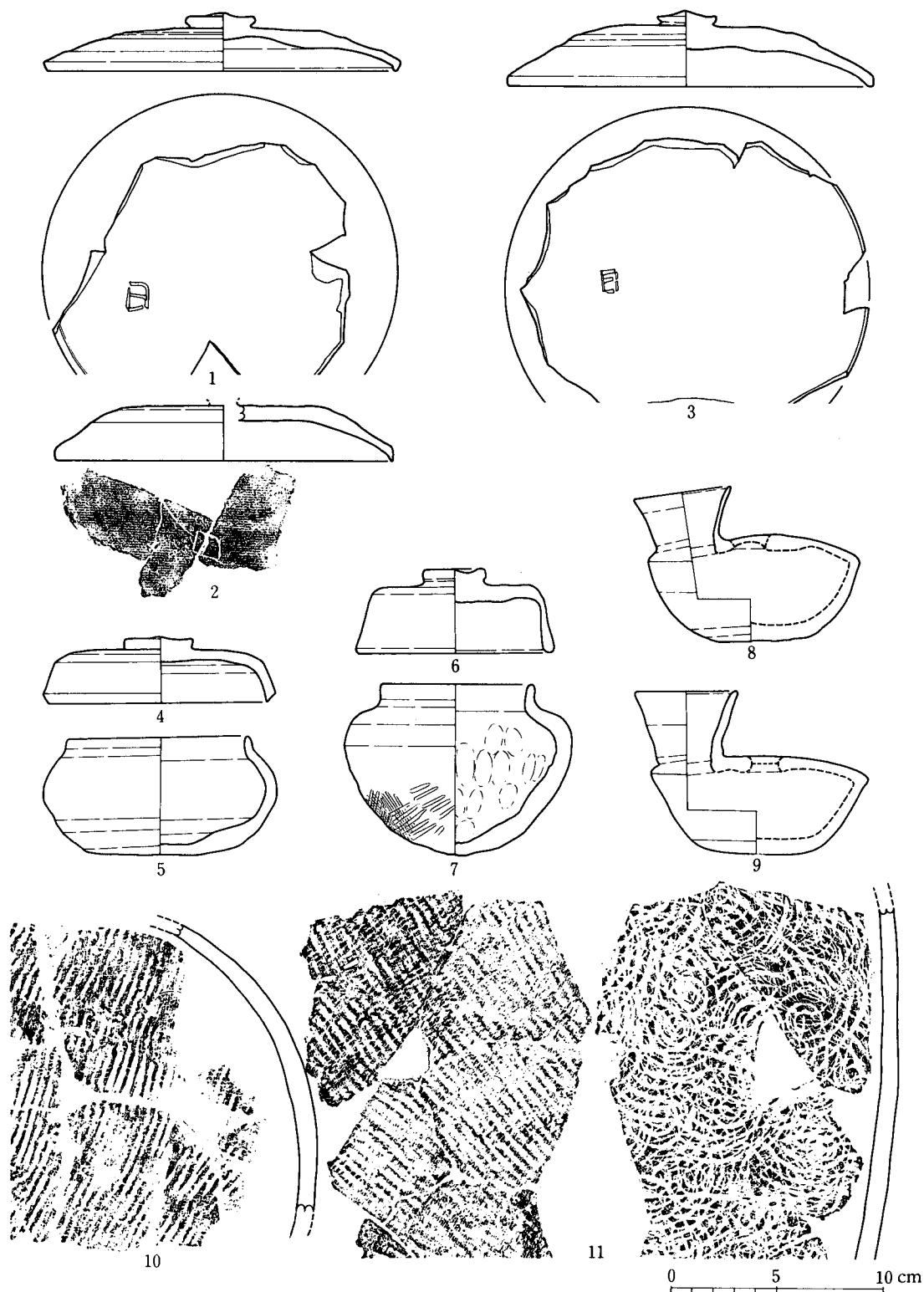
第11図 第3号窯出土須恵器



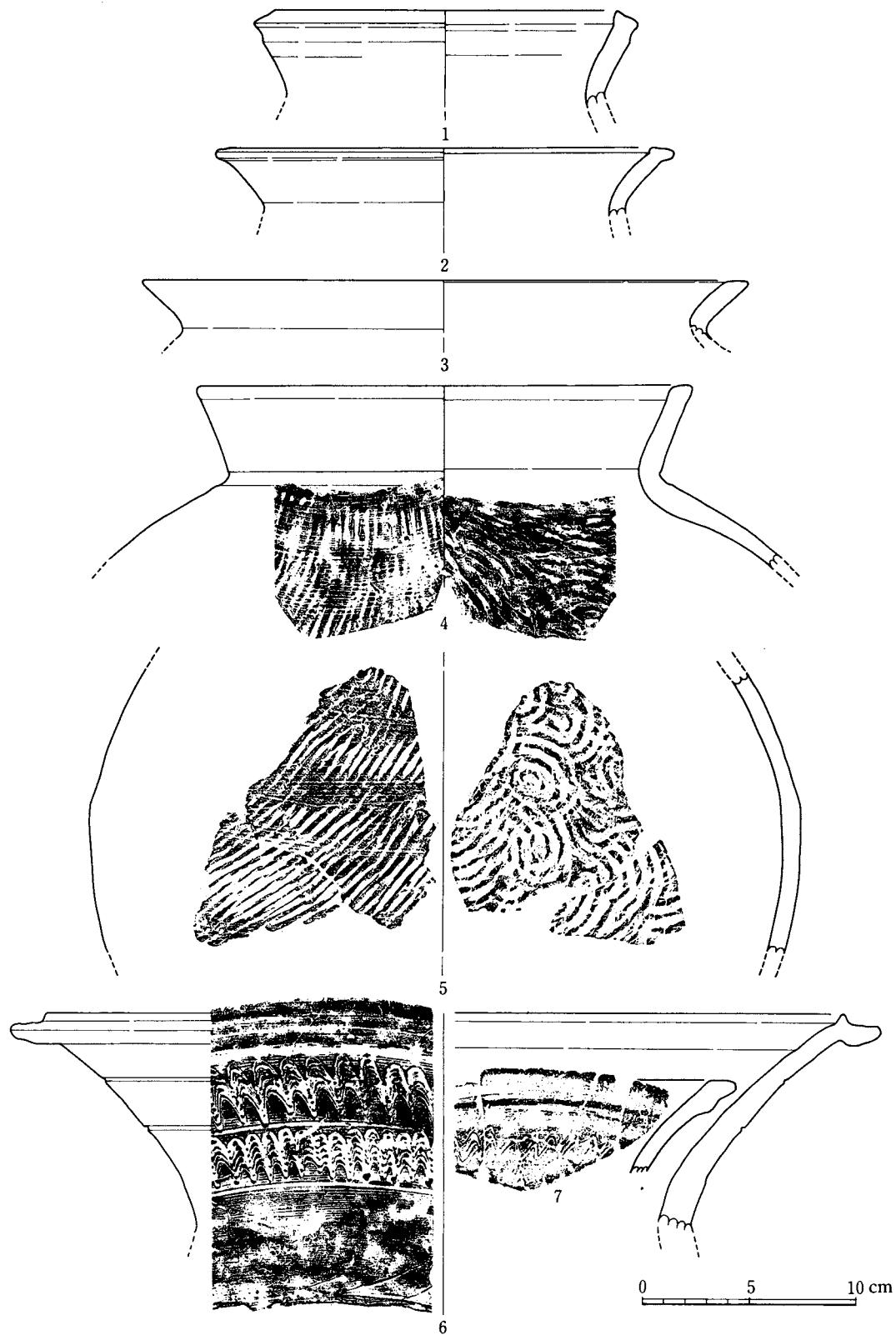
第12図 第3号窯出土須恵器



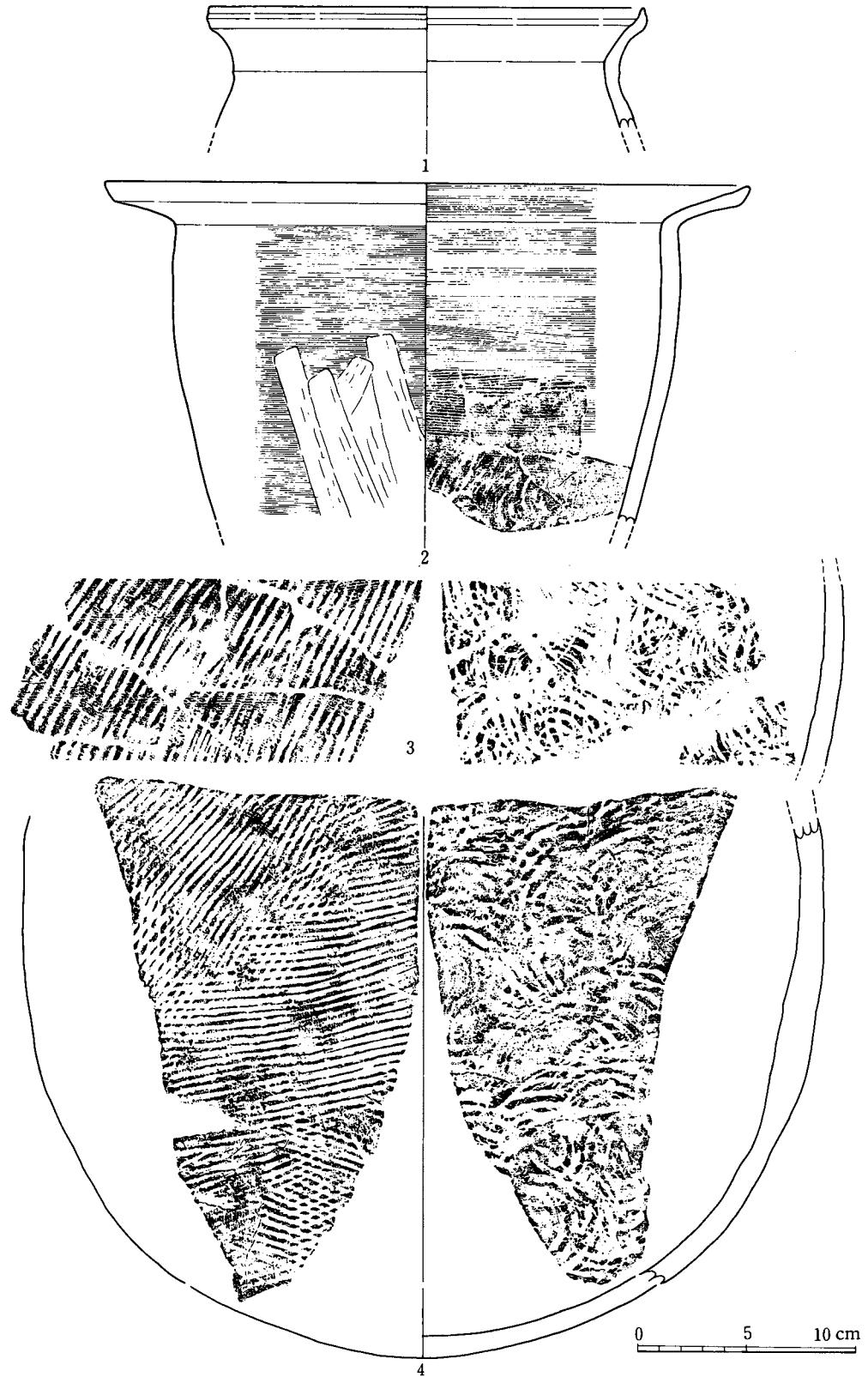
第13図 第3号窯出土須恵器



第14図 第3号窯出土須恵器



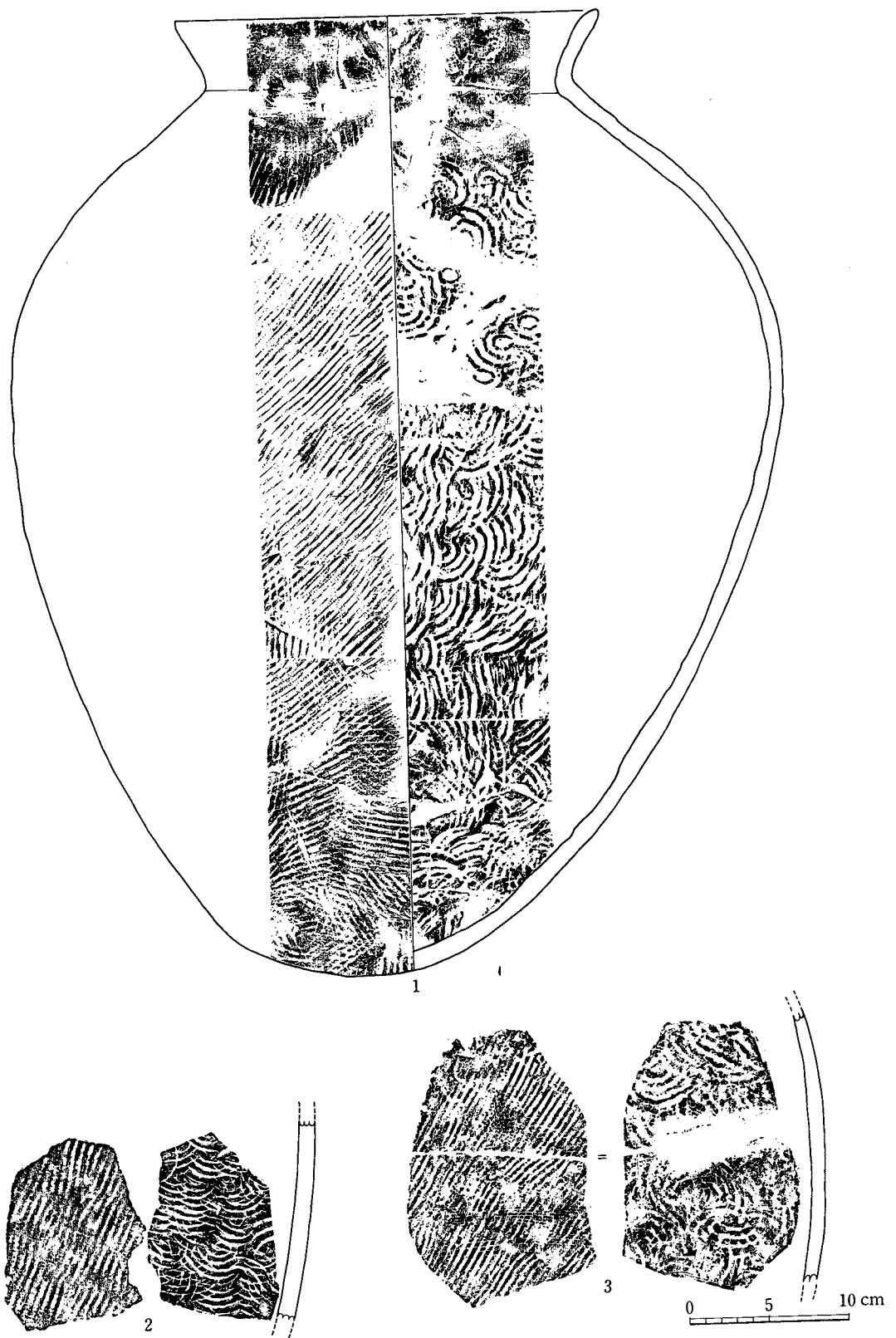
第15図 第3号窯出土須恵器



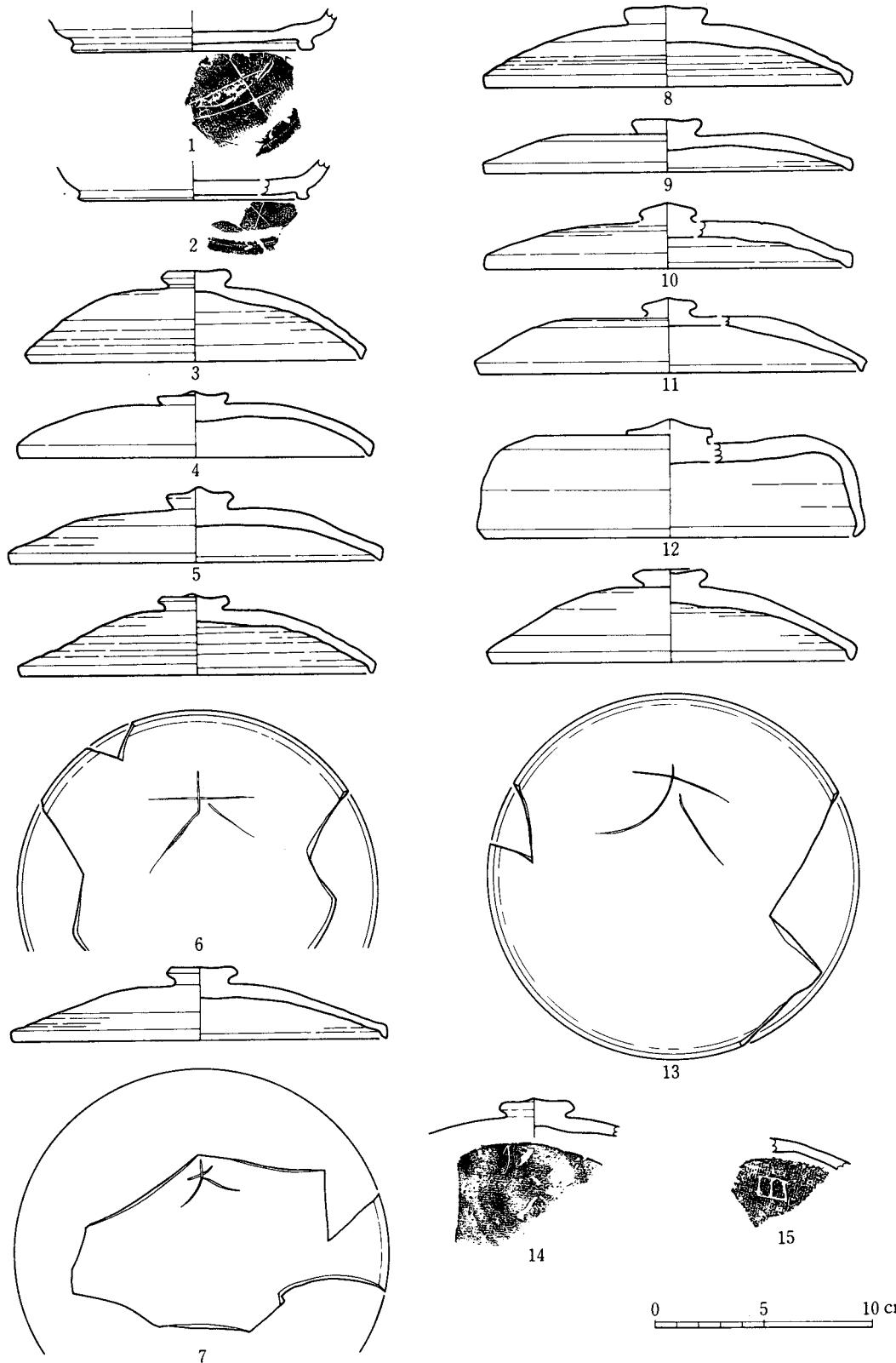
第 16 図 第 3 号窯出土須恵器



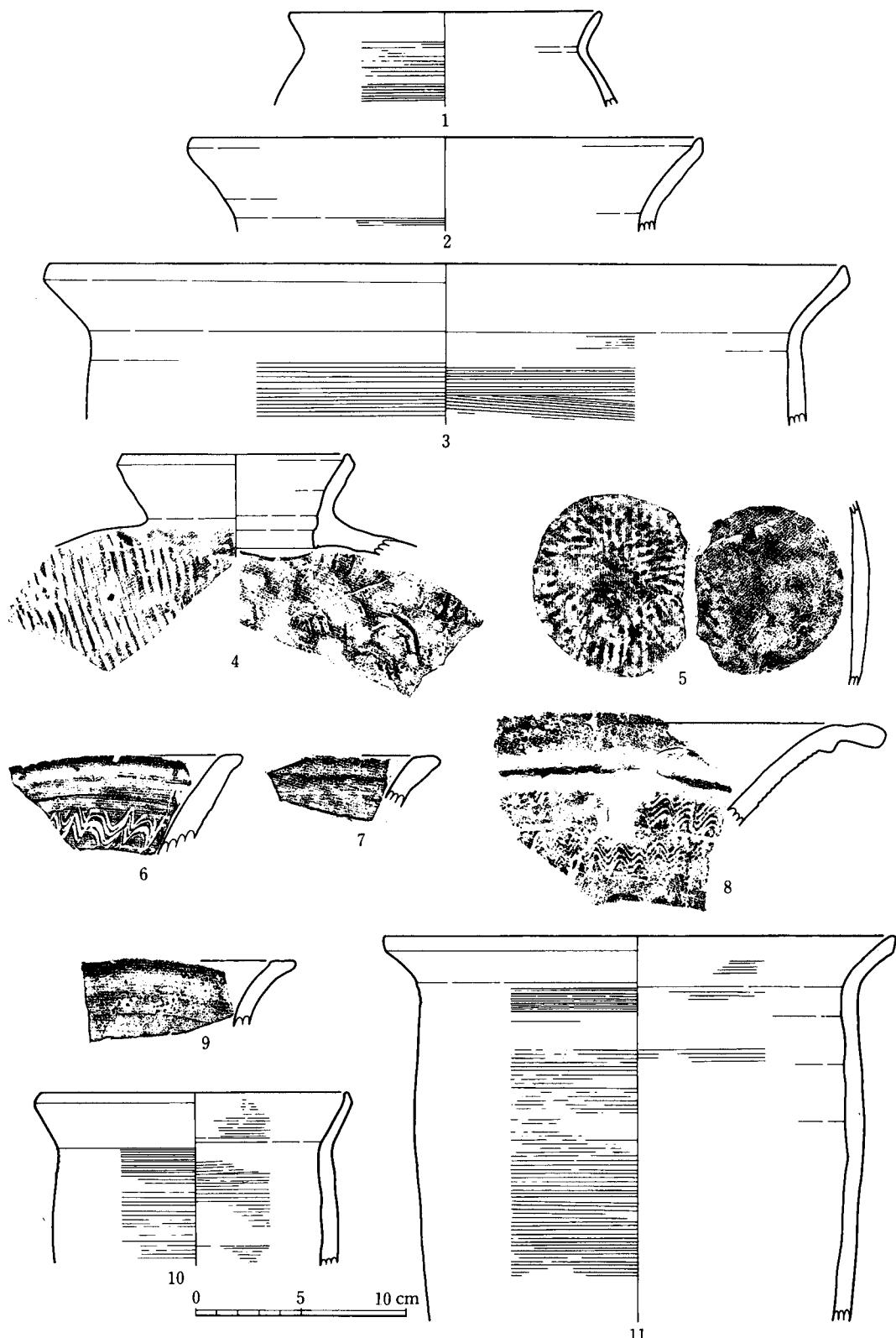
第17図 第3号窯出土須恵器



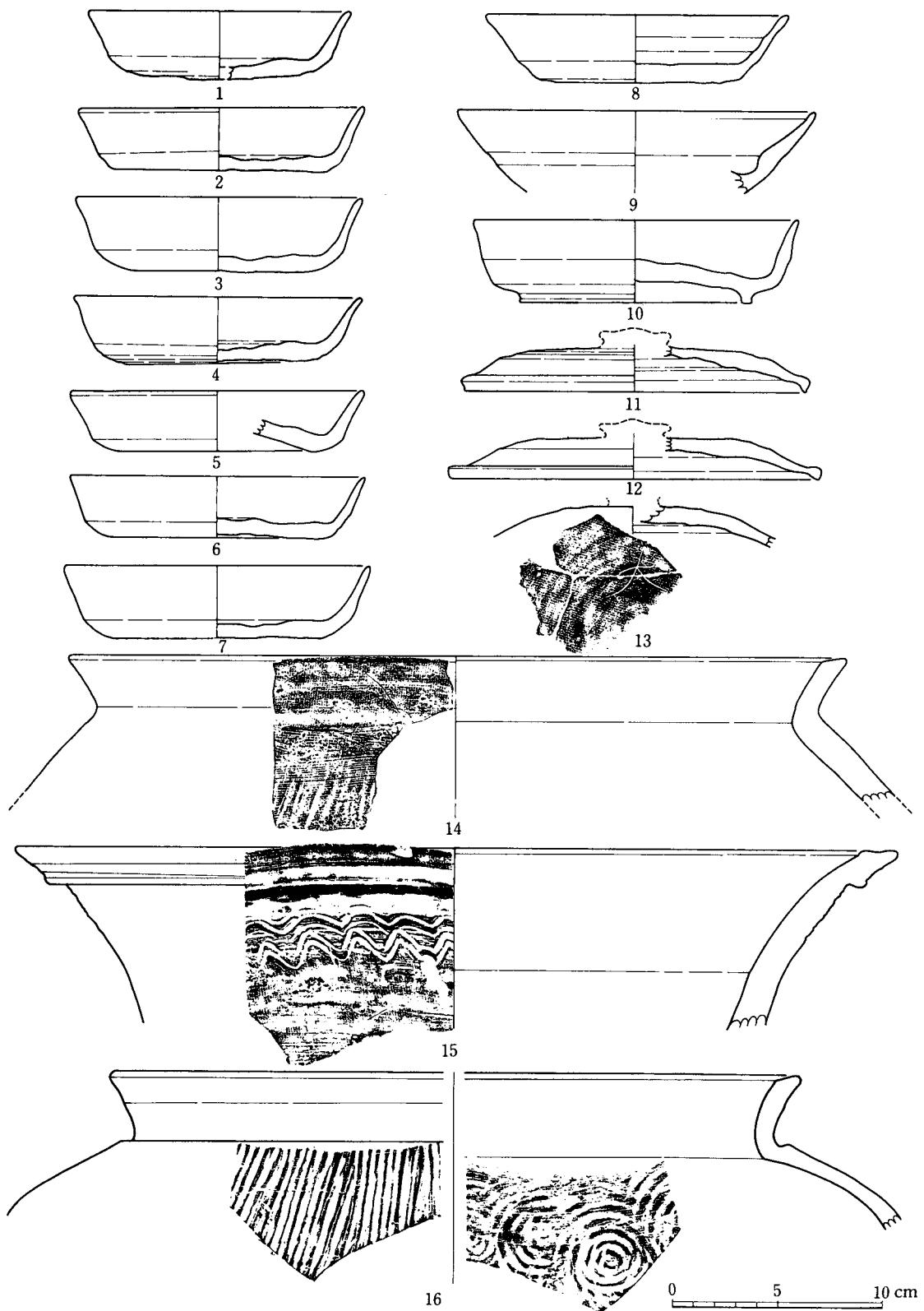
第18図 第3号窯出土須惠器



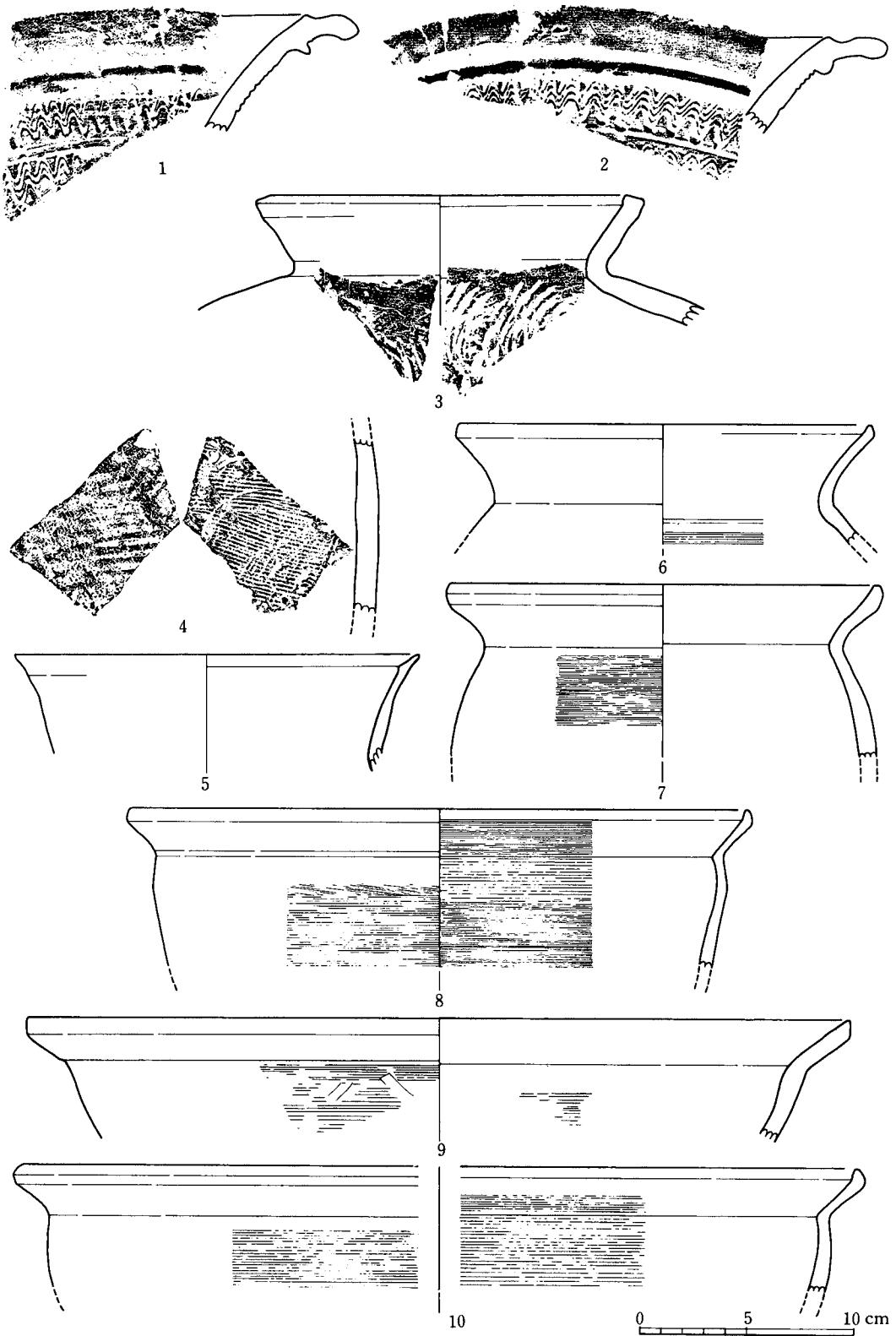
第19図 出土須恵器（各トレンチ）



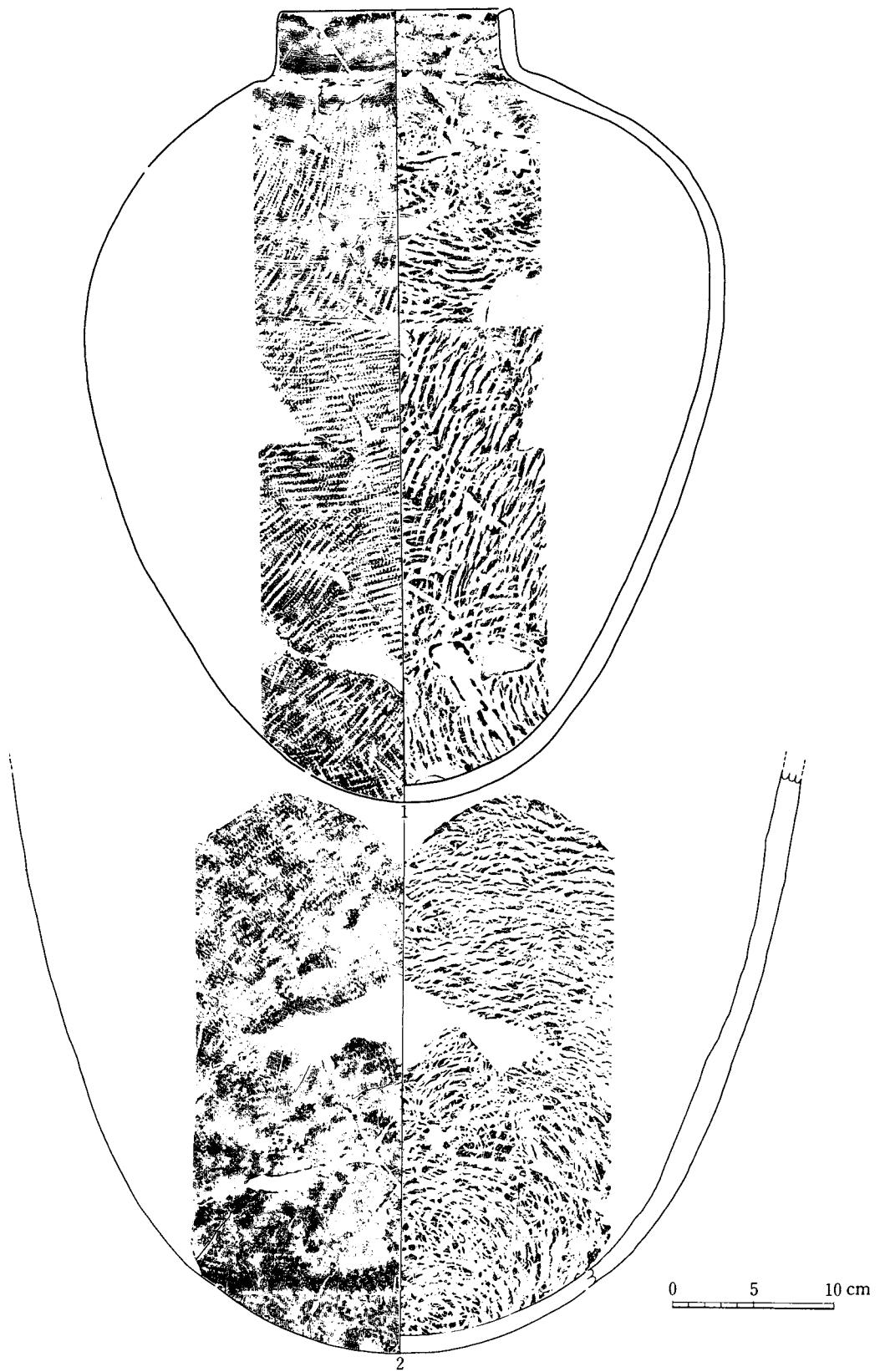
第20図 出土須恵器 (1~5 石組出土、他はトレンチ出土)



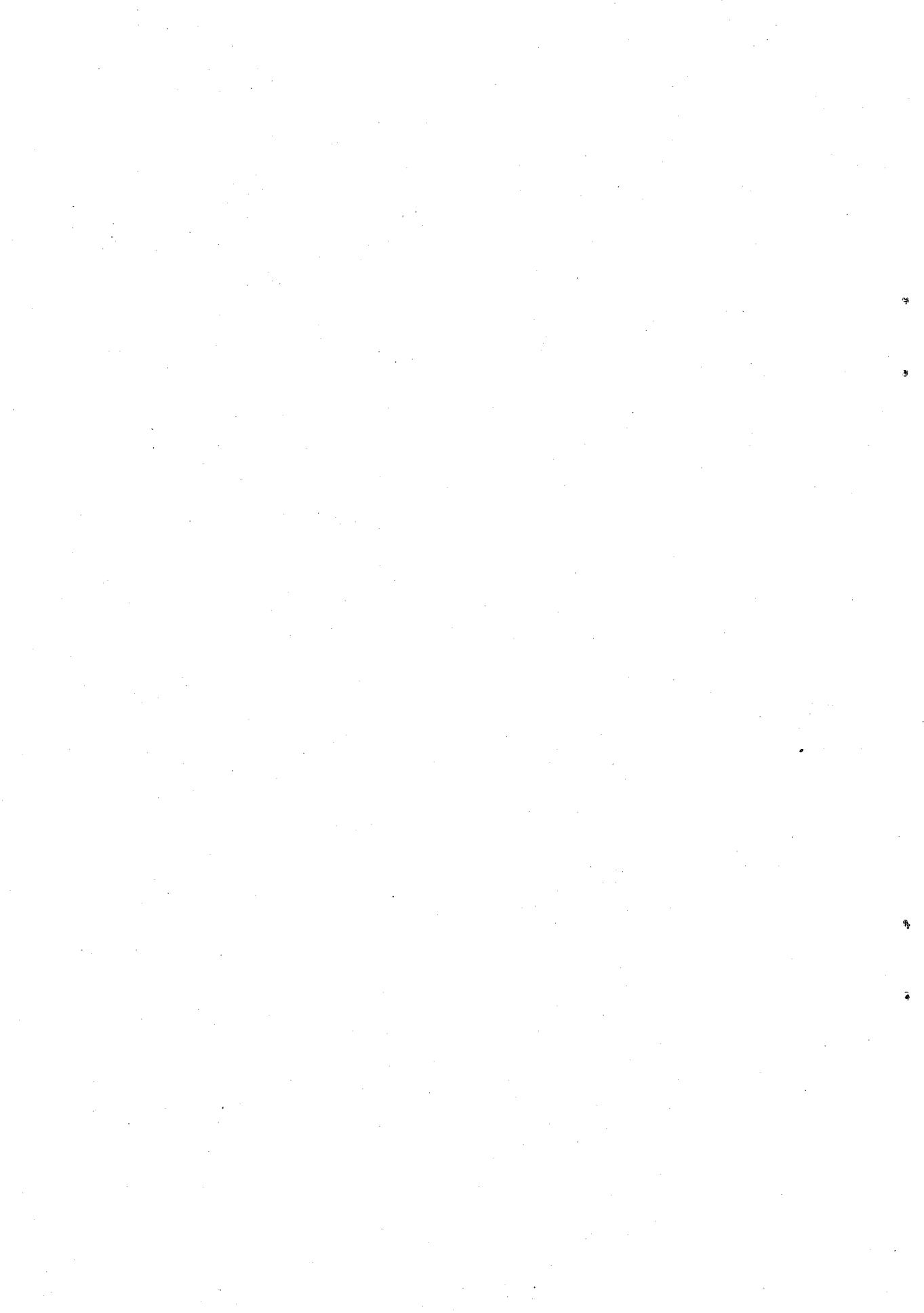
第21図 出土須恵器



第22図 出土須恵器



第23図 出土須恵器（トレンチ）





遠影（北より）



近影（北より）



第1号窯第1床面の検出状況



第1号窯第1床面出土状況



第1号窑第2床面检出状况



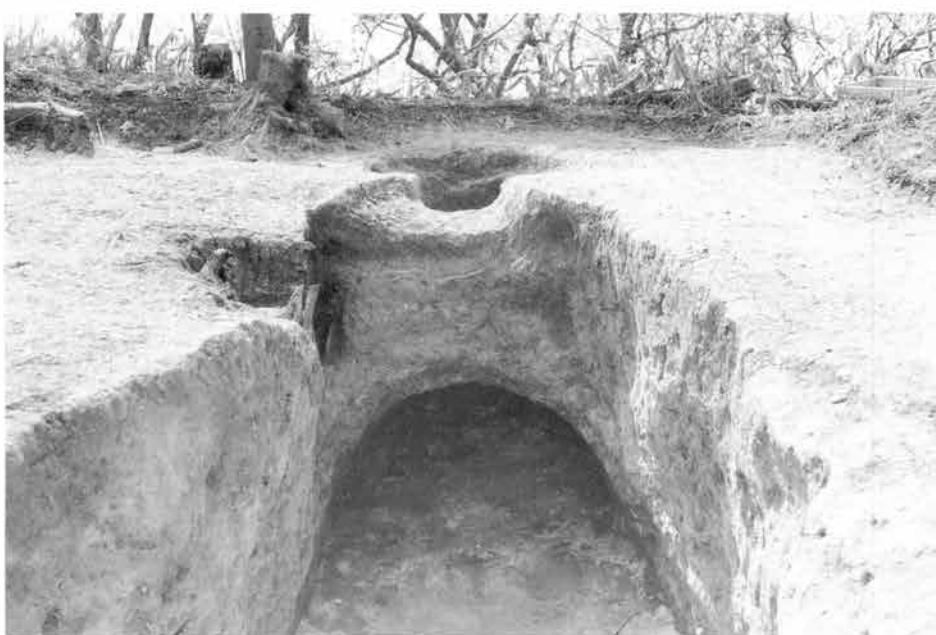
第1号窑床面上层断面

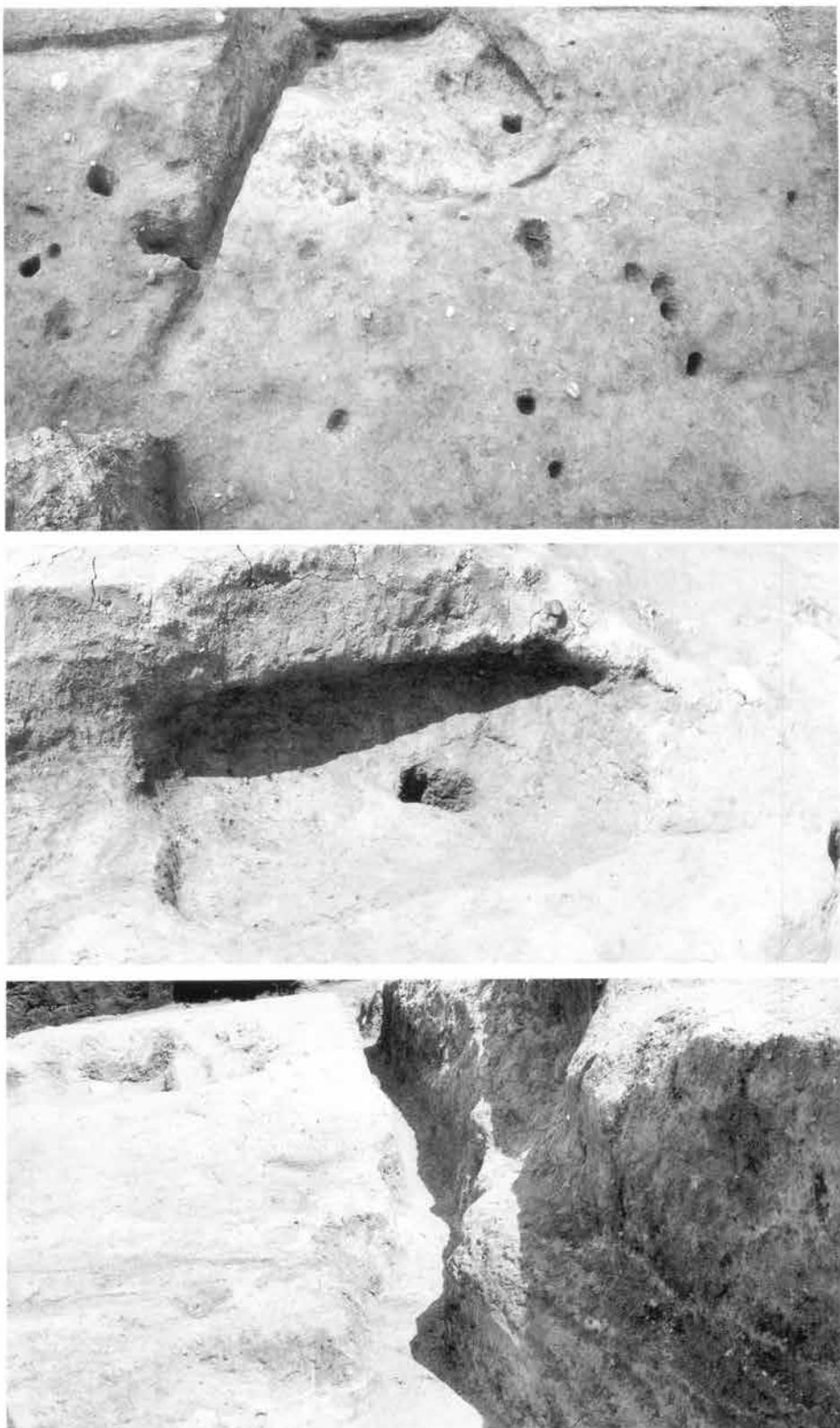


第1号窯全影（北より）



第1号窯全影（南より）

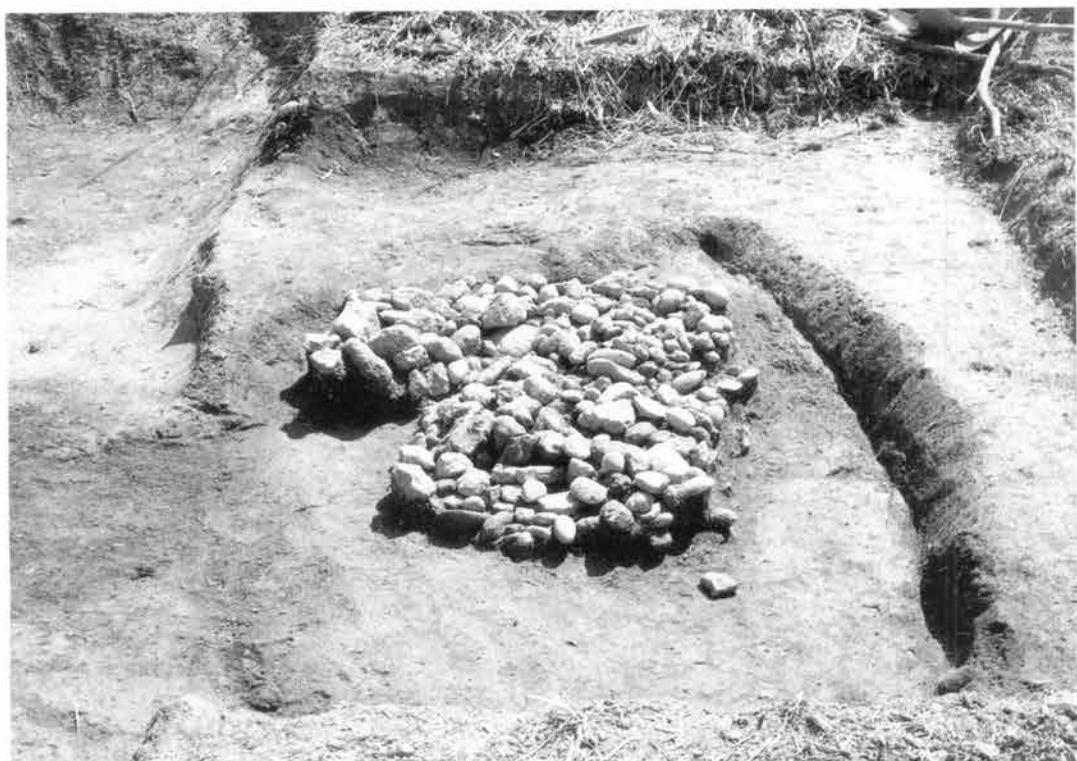




上:第1号窯前庭部の状況 中:第1号窯前庭部内ピット 下:第1号窯排水溝



上:第1号窯灰原瓦出土状況 中:第1号窯天井陥没状況 下:第2号窯石組遺構の慰靈祭



第2号窯上面の石組遺構（北より）



第2号窯上面の石組遺構撤去後（北より）



第2号窯全影(北より)



第2号窯煙道部



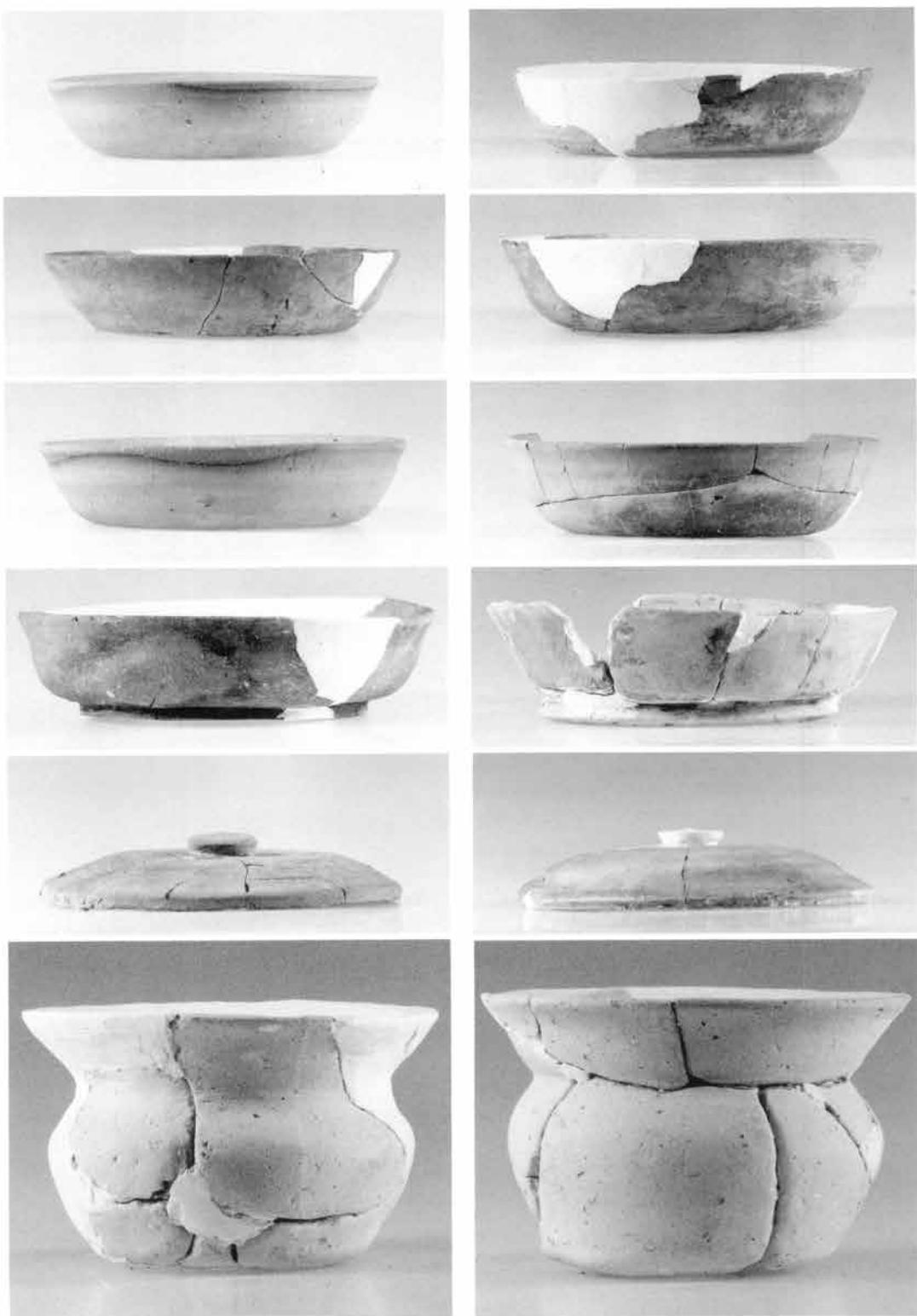
上:第3号窯全影(北より) 下:第3号窯床面遺物出土状況



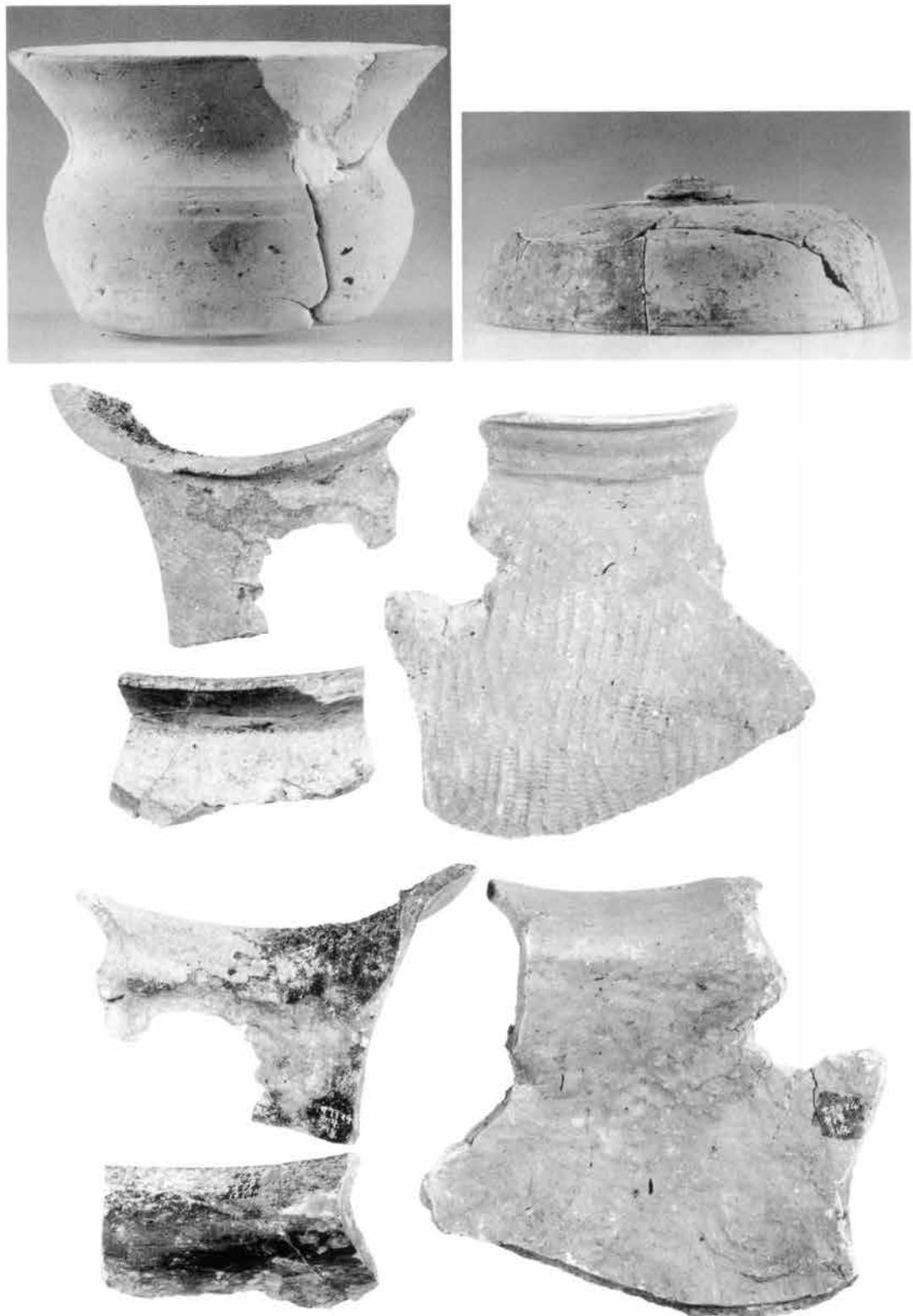
調査終了後遠影（北より）



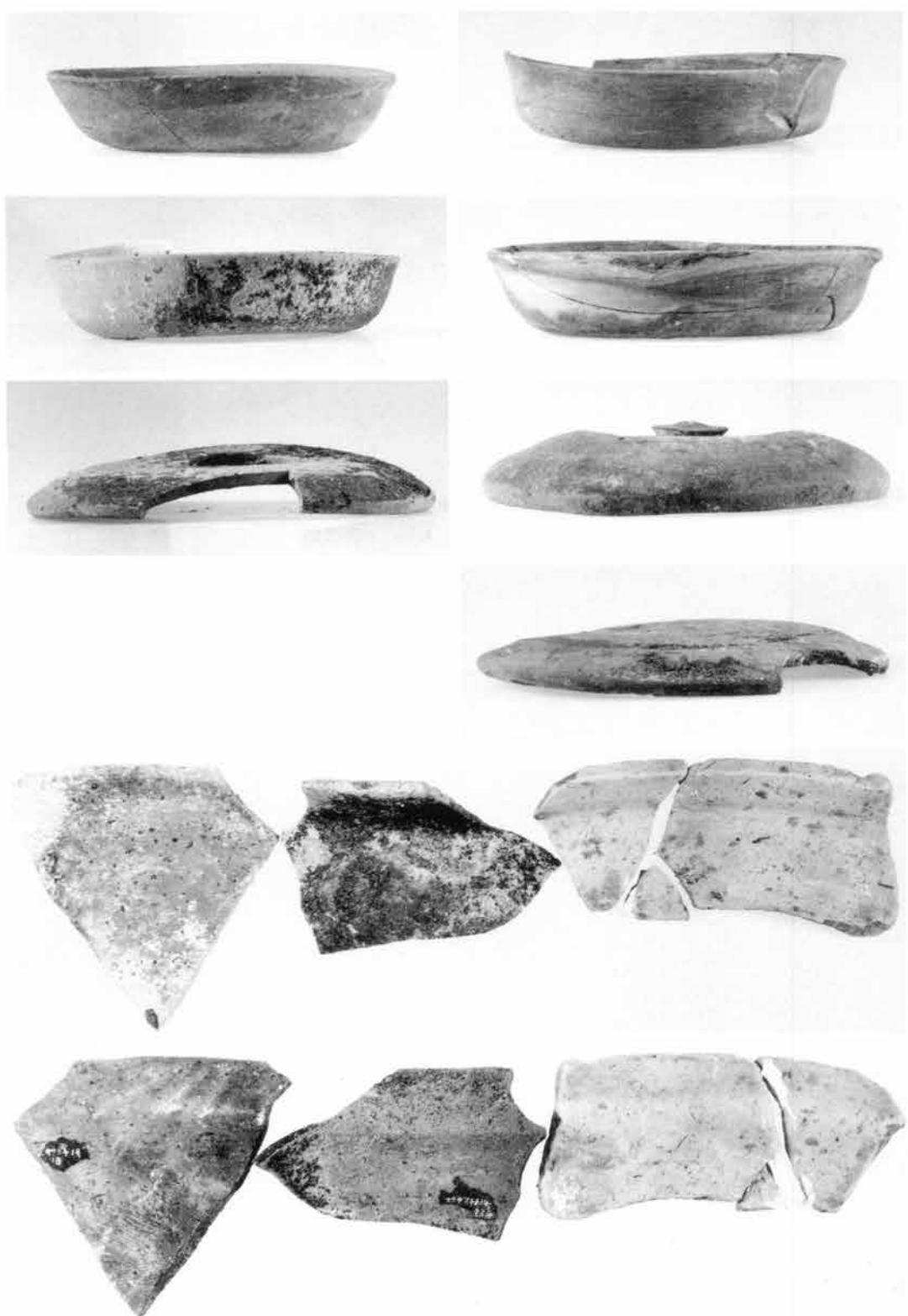
調査地に迫る加賀産業道路工事



第1号窯出土須恵器



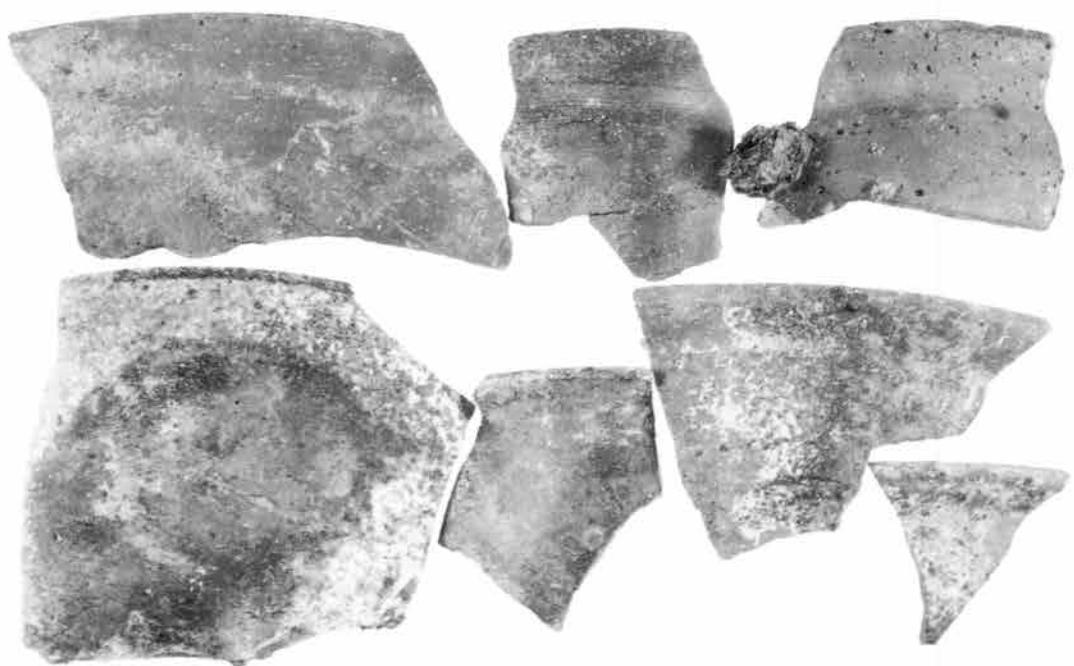
第1号窯出土頃器



第1号窯出土須恵器



第1号窯出土須恵器



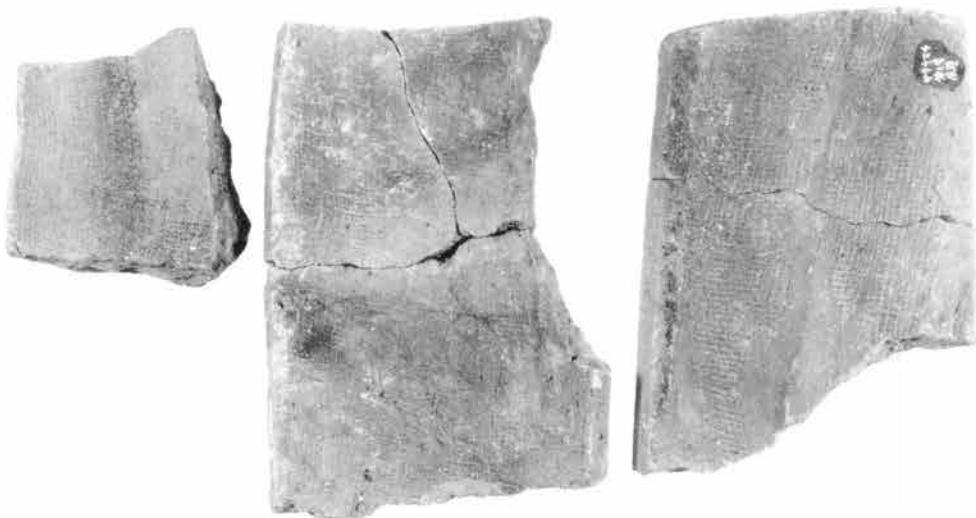
第1号窯出土須恵器



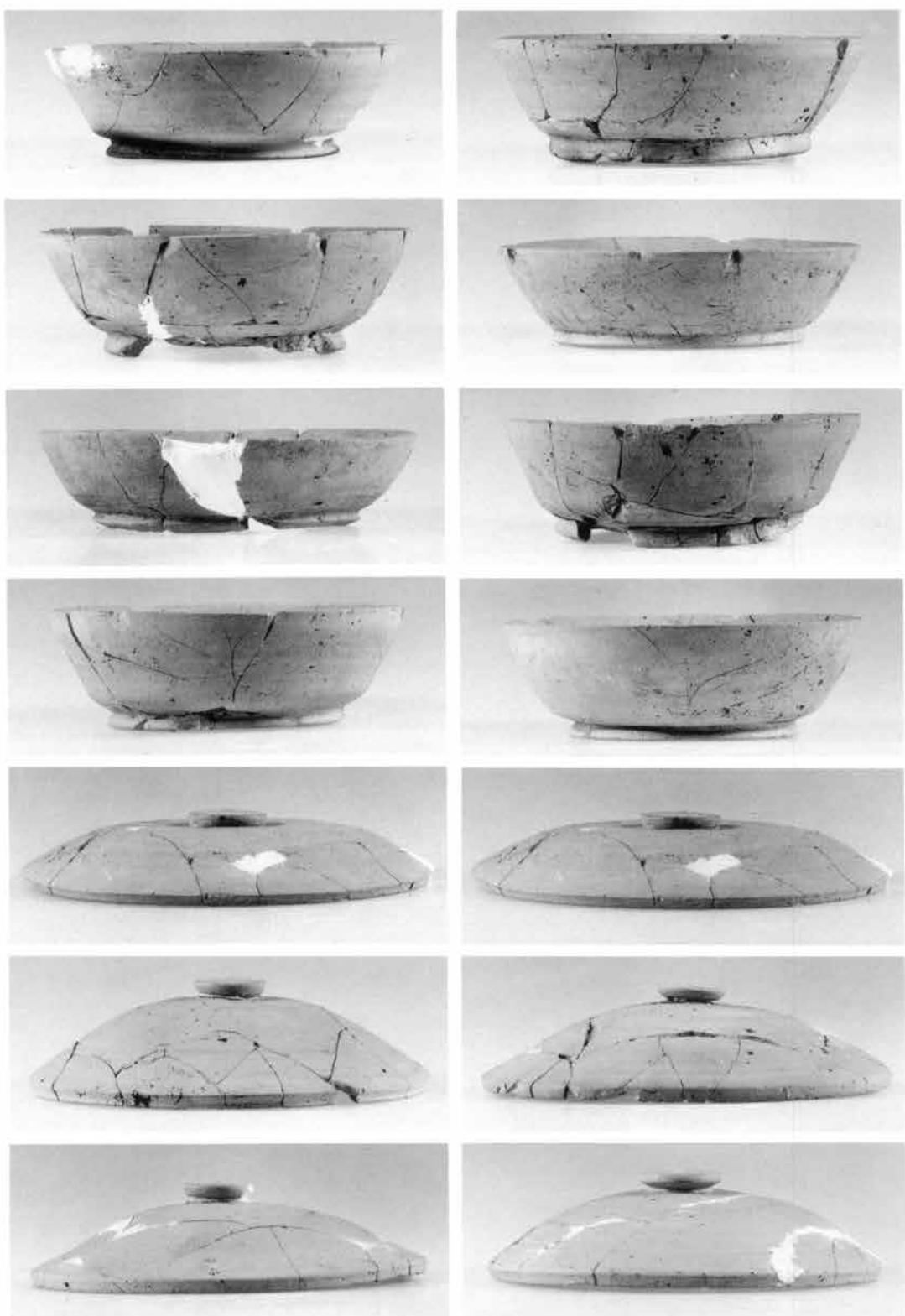
第1号窯出土須恵器



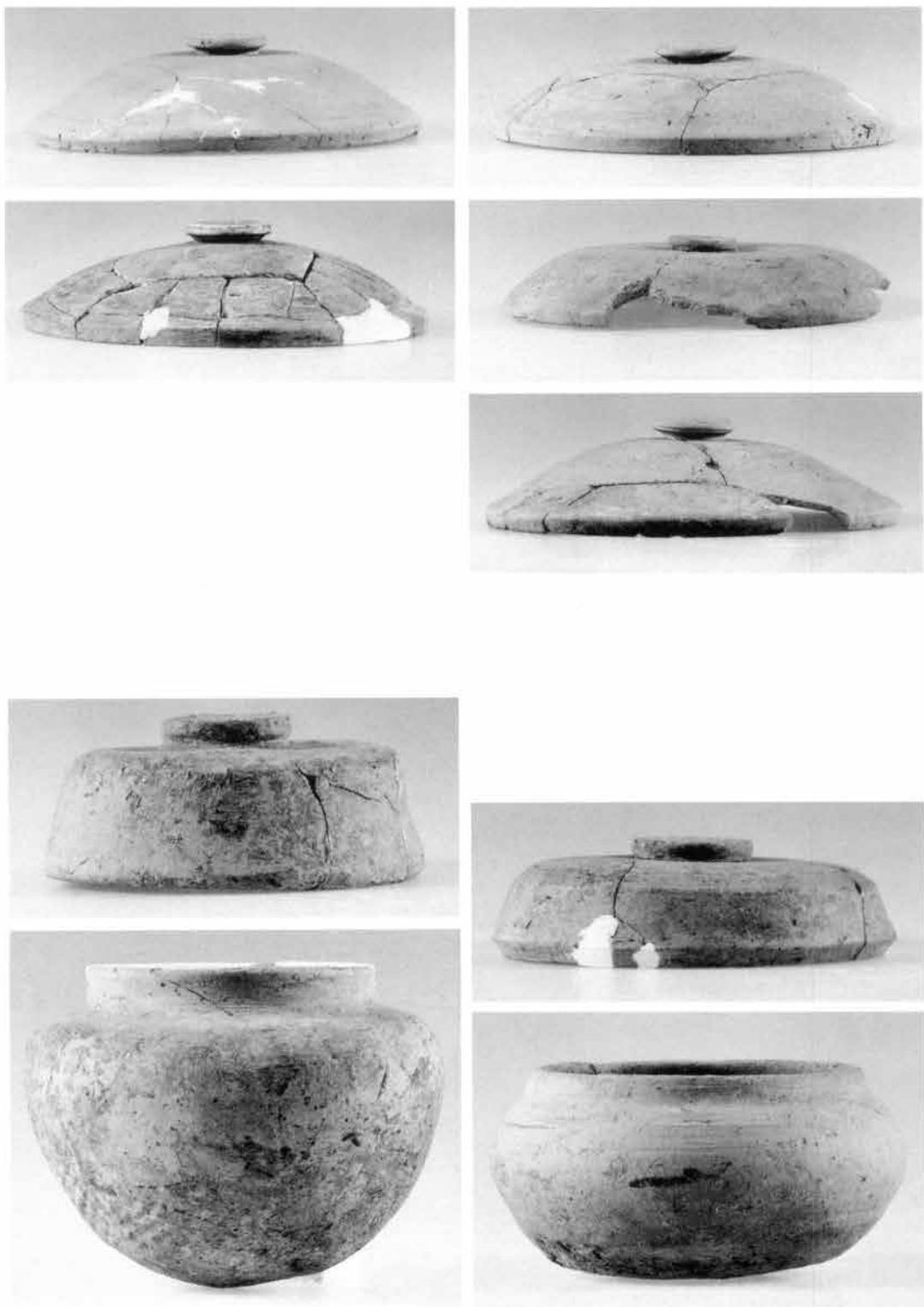
第1号窯出土須恵器



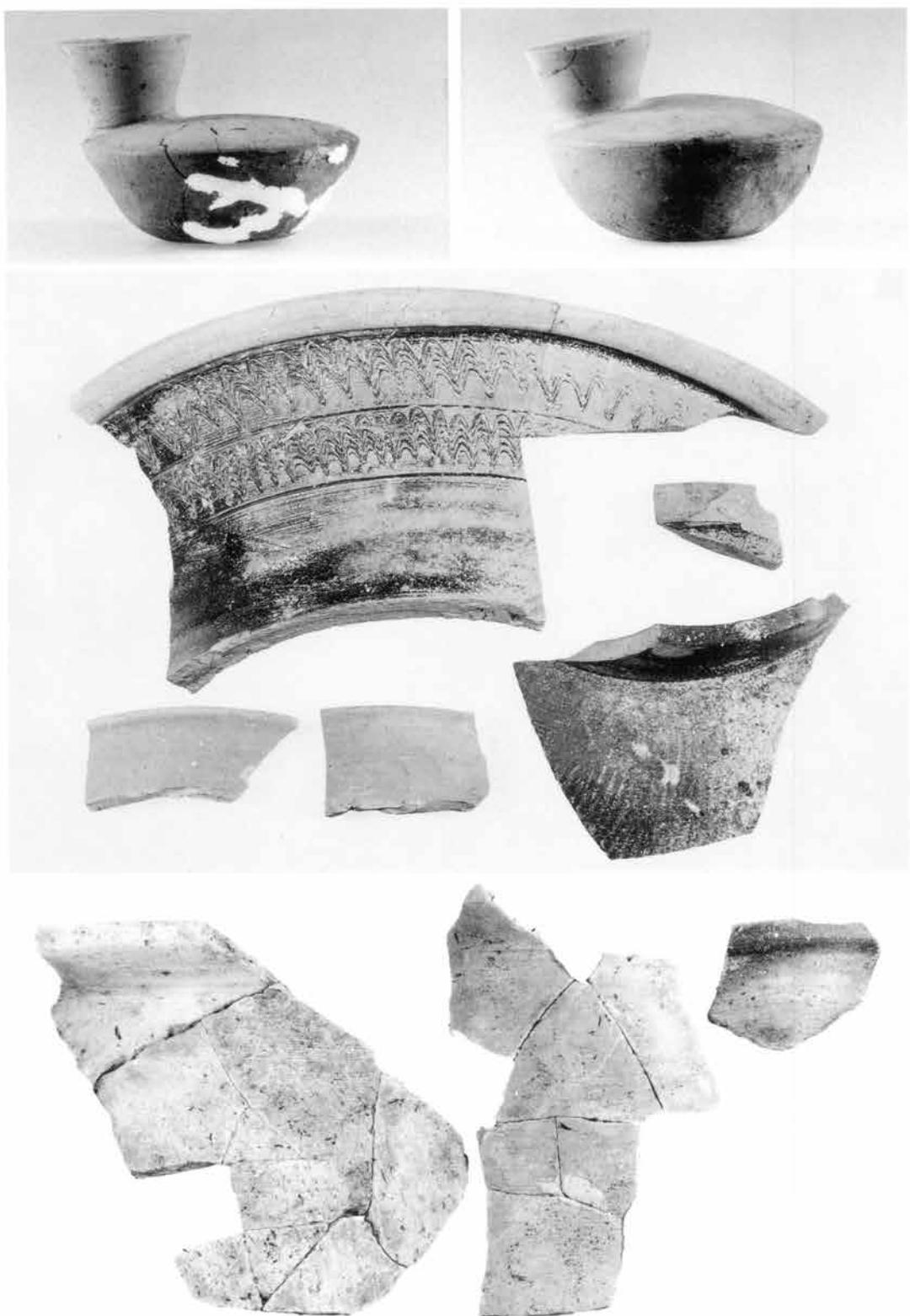
第1号窯出土瓦



第3号窯出土須恵器



第3号窯出土須恵器



第3号窯出土須恵器



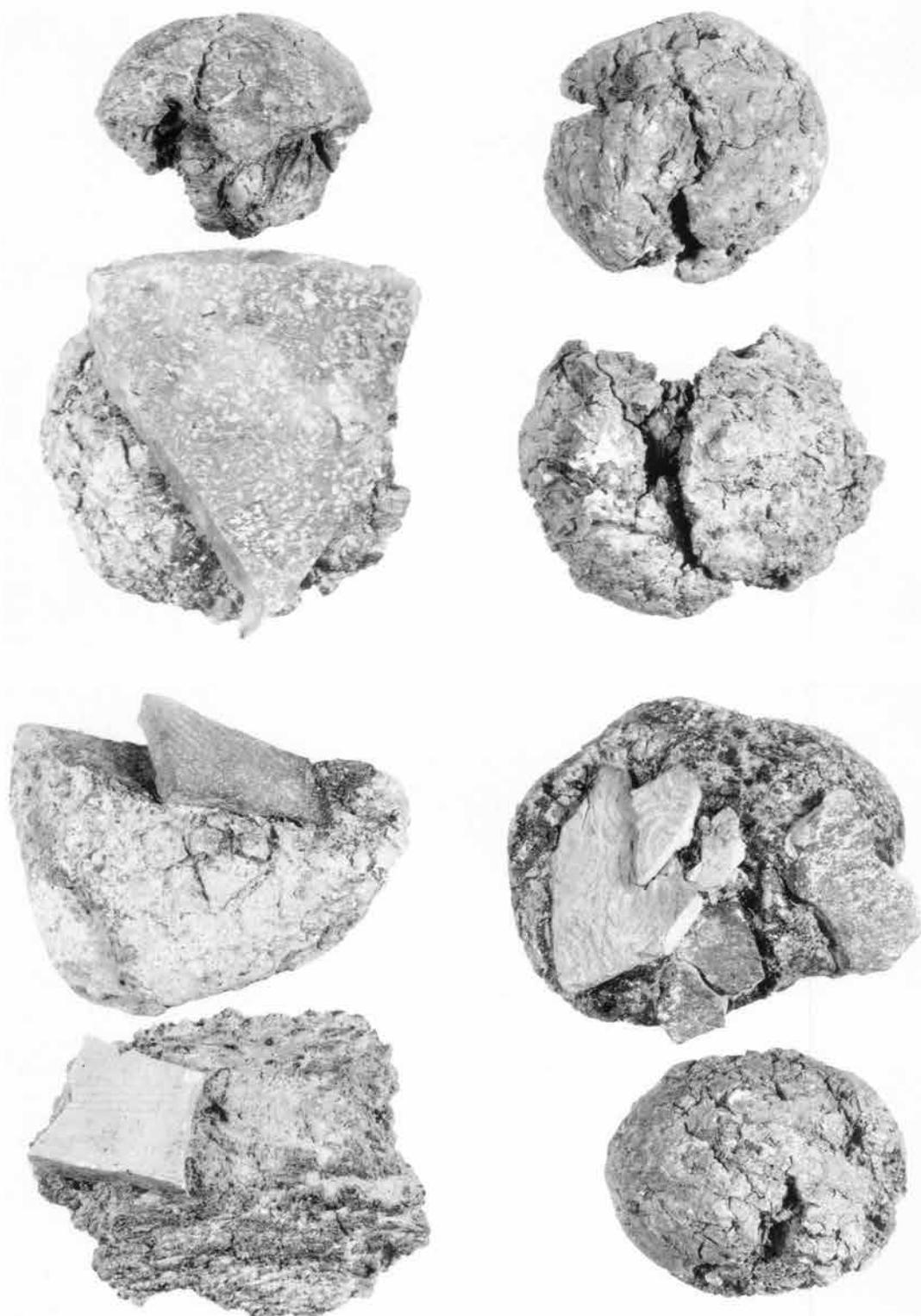
2号石組出土須恵器



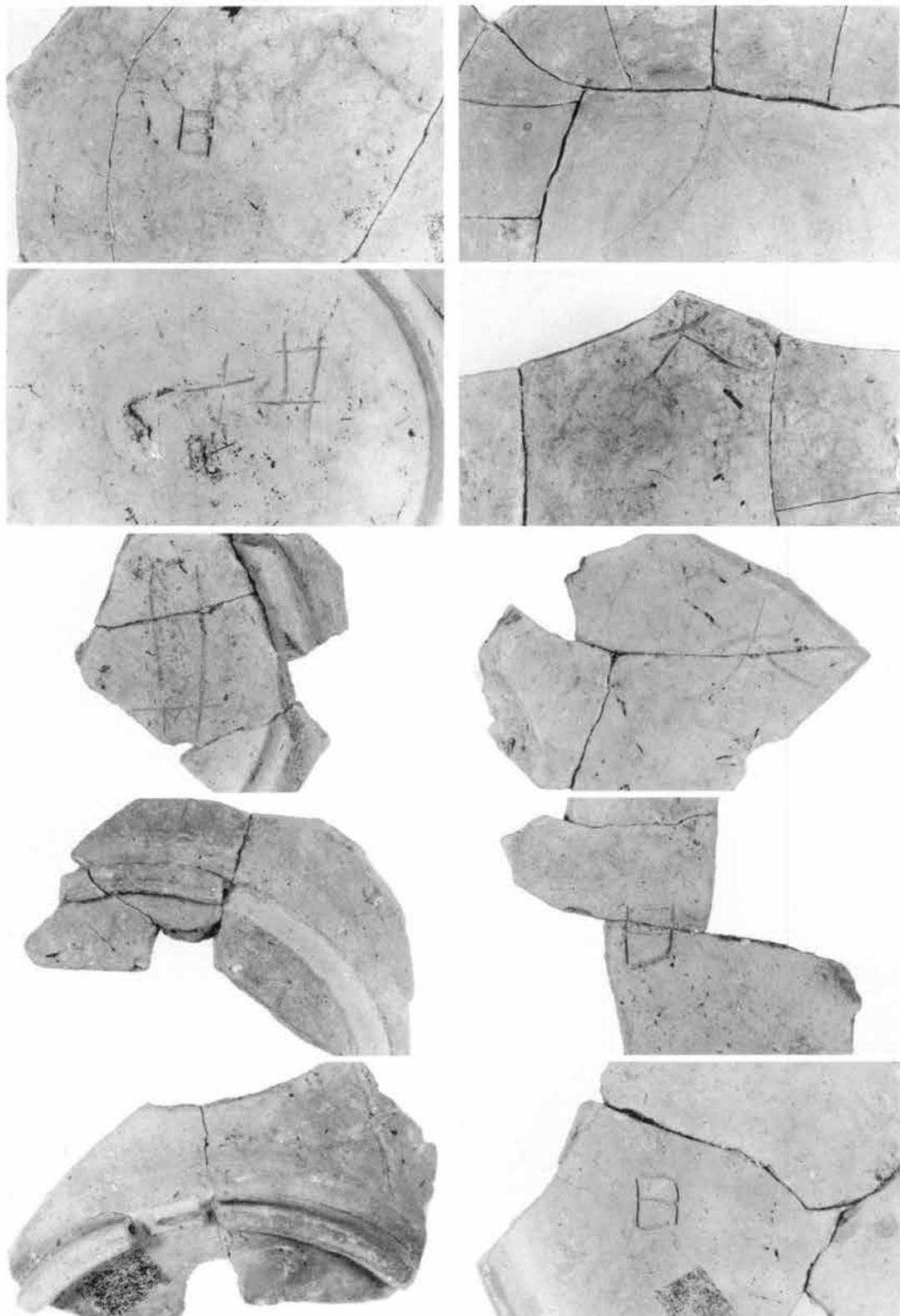
サクラマチ窯出土須恵器



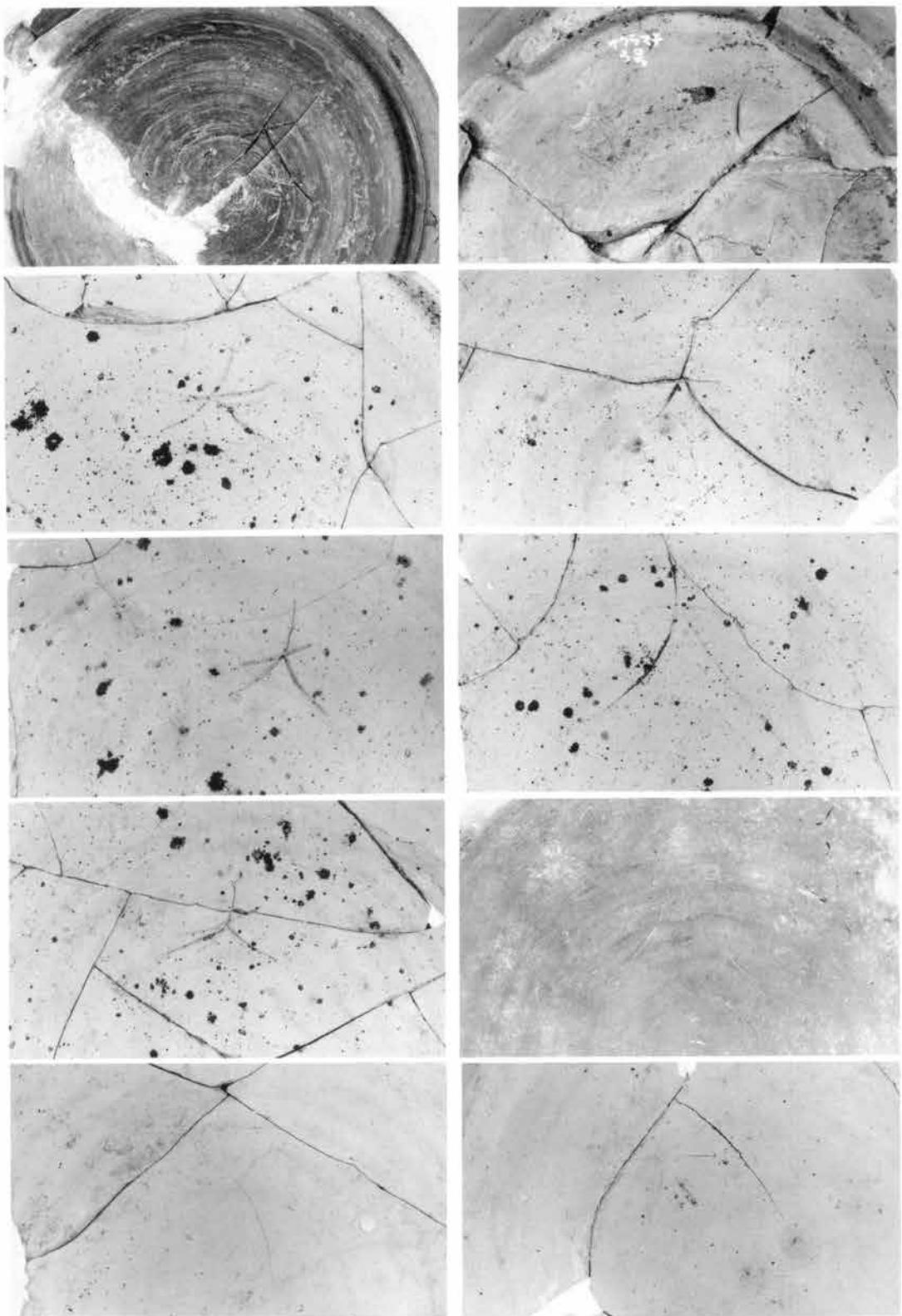
サクラマチ窯出土須恵器



サクラマチ窯出土窯壁、焼台



サクラマチ窯出土ヘラ書須恵器



サクラマチ窯出土ヘラ書須恵器

辰口町来丸サクラマチ窯跡

辰口中部地区農免道事業に係る
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

資料編

発行日 昭和58年3月31日

編集・ 石川県立埋蔵文化財センター
発行者 金沢市米泉町4丁目133番地

印刷者 (株)橋本確文堂
金沢市大手町2丁目35番